俳諧

十萬發句集　春

911.308
八
春

分類番号 911.3
図書番号 2909
巻冊番号 1/21
聖和学園短期大学図書館

洞海舎涼谷編
一具菴一具校

俳諧
十萬發句集

書肆 嵩山堂蔵版

十萬發句集序

世乃誹諧にあそふ輩多き
ことさら一家数を流して
人をしるこゝろとしとせす
かゝれハ此まゝに此書の編
ハなりけれそハ撰乃え

序

なにやうに何時うつりては
わけて又もとりゆきてうつらも
かなるうちにしてはおも
つくもいとあはれなるか
まれにて年ごろにおもひ
思ひはへとも六兵衛ハその
花にほうはきこゆるハいさく

萬代までも同時の
風をまつ本朝人のよう
てりなし今も大なる人
定かひいつかおぼえられ
まさ世くれさまたる句をし
られける十番発句集は時の
懐りかくる人の心のほを

屠蘇　太箸　懸想文　寶引　藏開　とんと　羽子　小正月 十丁　小松曳　冴返　雪解
穂俵　雜煮　弓始　福曳 八丁　今年　萬歳　粥杖　子日　養父入 十一丁　春寒　春雪 十四
みし肴　大福　着衣始　水祝　左義長　犢曳 九丁　正月　七種　傀儡師　殘雪 十三　初霞 十五
鏡開　年男　謡始　破广弓　飾焚　手鞠　睦月 十丁　人日　餘寒　淡雪　霞

長閑 十八　遲日　絲遊　[illegible]市 廿四　佛坐　土筆　福壽艸 廿九　白梅　椿　鶯 五十一　蜆
永日 十九　暮遲　東風 廿一　若菜 廿六　嫁菜　蕗薹 廿九　木芽　柳 四十一　落椿 四十九　鷺 五十五　蝌
暖　水ぬるむ 廿　春風　薺 廿七　鶯菜　蕗芽　梅 三十一　挿柳 四十七　猫戀　白魚　雲雀　海苔
麗　陽炎　春雨 廿二　芹 廿八　下萌　若草　野梅 四十　松花　百千鳥　駒鳥 五十七　御忌 五十八

春之中

二月 五十九　夜更着　二日灸 六十　初午
春月 六十一　朧月 六十三　朧夜 六十四　春夜
春宵 六十五　初雷　出代　彼岸
涅槃會 六十六　西行忌 六十七　水口祭　田打
畑打　初虹　春日　春水 六十八
春海　春川　春山　春空 六十九
春雲　初花　初櫻　糸櫻
接木　接穗 七十　挿木　苗代
種卸　菜花　大根花 七十一　虎杖
早蕨　薇　獨活　蒲公英
麻蒔 七十三　種芋　杉菜　菊苗
菊分　芦角　芦芽　蔦芽
蓼萌　艸萌　蘩縷　春草
畑燒　山燒　燒野 七十四　春野
燕　雉子 七十五　帰雁 七十八　行雁
雁別 春雁　春鳥　親雀　孕雀 七十九
雀子　雀　鴨引　鳥巣
巣鳥　鳥交　初蛙 八十
蜂 八十二　蜂巣　虻　蛙
螺 八十四　落角 八十五　鮒鱠　蝶

春之下

三月 八十六　汐干 九十　櫻　花雲 九十八　海棠　菫　躑躅　呼子鳥　小鮎　春惜

弥生 八十八　春霜　山櫻 九十三　花雨 卆九　梨花 百　連翹 百二　藤 百三　鳥雲入　蟄　行春

雛　別霜　遅櫻　花見　杏　辛夷　山吹 百四　麥鶉　竹の秋　春暮 百七

雛合 八十七　桃 八十九　花　木蓮花 九十四　木瓜　茶摘　艸麥 百九　若鮎 百六　三月尽　春題不知 百八

俳諧十家類句集 春之部

洞海舎涼谷編
一具菴一具校合

元日

元日やかくれて二日の精進庵　東京 寿芝

元日の関出る人の雨衣数寄　大梅

元日や海苔も梅にも折られぬし　一蕙

元日の古き気色や常盤橋　陸奥 碓嶺

元日やよき日の空の稀一つ称　畄よ女

元日の外に並べて親鳩の里　常陸 涼谷

元日や疱瘡人の安楽と明けて通し　一具

元日は物売声もなかりけり　箱館　一甫

元日や軽く見ゆる武士の刀　羽前　吟霞

元日や人も通らぬ肴町　民城

元日や我らが前の猫の飯　左琴

元日や人ゆかしうして寝過る　陸奥　夕山

元日乳飲茶も起てのみ喜　芭角

元日や子も起されて空気　越後　左陸

元日や又一つ増よし家のうち　松鳰

元日乳忘れて晴や風なし　東京　子晴

元日や暮るるも見ゆる雪の峰　千輅

元日や見し姿まま山の形　キ山

元朝

元日やつゝ霞して白の松　阜府

元日や夕日入るまでの人通り　素樸

元日や暮て細工町のならひ　左紙

元日やすゞめの屋根も動かぬ浮　有一

元朝の松の影さす碁盤哉　陸中　素来

元朝や出て[illegible]　常陸　玄々

元朝や梅も綻ぶ女かな　吟霞

立春

春立や竈の上の鶯の声　弌山

春立や有り出し栗子の残り　越後　弘正

春立や枕屏風の富士の山　千輅

春[illegible]軒の盃かりけり　一貝

初春

春立や小舟の棹も持あまり　箱館　碓嶺

春立やあやまらぬまて雲の宿　布席

春風や雨を笑ける軒の青　大梅

春立ていつとなき空の夕かすみ　東京　松井

初春や鶴亀の図を借く子借容　月嵬

初空

初かすみ真の丸くして風を杉　羽前　稲妙

春風や雀も以るき起ぬ空　陸奥　双二

初空に持ちあけて晴るる景を分　越後　五嵬

初雛

春の雨や扇権し口の口　菊よ女

初雛や抽へつらる松幸く　素芯

春の夜や枕添ふる友を交く　松鴻

初鳥

初こゑは四寸ほとなる松の露　陸奥　二晶

千代を契る声かなしき名乗鳥　東京　正流

初空も呼はれ雪家や初鳥　羽前　旭丘

初日

手ふれし人の手はて初日かな　東京　丁知

伏拝む僕や初日たつ空　常陸　民枝

えりよりも初日さしこむ住居かな　東京　周慈

松竹を並へて見れし初日影　玄々

今朝春

今朝の春上る八重は上野の札　一貝

梅松の句に添ゆ今朝の春　羽前　川長

年寄と云ふ事をしらぬ今朝の春　武蔵　樂水

以つもより松山寒きけさの春　陸奥　大貫

明春

まつ人の来るを待つや明の春　羽前 寄喬

見るものも変りし形か初の春　東京 久藏

新穂も新葉も嬉し今の春　上野 茶径

幸ひに出て初湯汲む茶の春　白晄

新風のかをると香て花の春　一萬

花春

常のまゝ志て新しや庵の春　文和

来る人に繁る門ある茶の春　陸奥 雨来

押し出る松も低しとも実の春　越中高岡 木言

君春

重箱を出す笑ひや金の春　上野 葛松

玉春

竹の戸や来て見る年の春　信濃 半山

年春

宿春

宿の春新月さへまた遊びかな　越後 鳴湖

庵春

常よりも窓も静かや宿の春　東京 ちかき

宿の春六十あまりの旅の家　羽前 巡雲

老松のくもりも晴しやわが庵の春　東京 南風

迎ふる客も別あしき庵の春　千之

年立

としの内にも嬉しき花の朝　椿海

御慶

心遠ひ志てもめでたき御慶かな　甲斐 芳谷

新玉のつきを祝ひて御慶かな　五晄

良き事の入るを待つ御慶かな　東京 禾木

横町に出て会う人に御慶かな　常陸 野棠

薬にも角帯さして御慶かな　一蕙

寄年を待して米屋の御慶かな　卓郎

年玉

年始

禮者

口上や上方の多葉粉採遣し　東京 子晴

とらく挨拶と出されハ隣の仕業なれ　竹是

年玉や実て子に取らる多葉粉入　松鳴

年玉や味噌らく忘れし貝杓子　下総 梅雪

家ゝを立帰りゆく年始かな　東京 妙子

年始まて兎に角しとかふ男かな　冉湖

若葉子負ひて帰る年始かな　陸奥 一之

借の肩借りて立袋かく礼者かな　東京 南濤

宿とらす一杯の礼者かな　下総 桐雨

挨拶し名の人もなく礼者かな　妙子

業の鳴呼ゆかし礼者かな　大梅

初暦

初夢

宝船

御降

捨し世の何かはしらぬ暦　箱館 琴雨

我の咲あるを以てと初暦　越後 蕉丘

先つ暦あけて見るなり先ず家し　秀女

母の手に持てハ目出たし初暦　常陸 山笑

舎根の知らや新年は初なれは　陸奥 一陽

黄の出さるるや先つ暦　越後 守桂

先つ夢や舟持家の初ひ　民枝

初夢そ咲かせけり神路山　五峴

戸を開けて梅の夢忘れ宝　東京 梅守

寝人待くさの夢之あるく舟、　秀叢

御降や大つちの手前にて、　茶静

蓬莱

御簾やこもる陽も松のみどり　東京 史千

ふ侍や猫も出けり河原町　、 荷竹

蓬莱や松のあくみも雛の芥　仝

蓬莱残二階へ備る市日の暮　、 武蔵 碩布

蓬莱を窮屈さうや茶屋の亭　南々

越後

蓬莱と以ふも似合ふ庵かな　万里

蓬莱をかざつくしとる男かな　下野 花甲

飾りける画蓬莱北向ひかな　吟霞

喰積

喰積を持て来る嫁の力かな　上野 雛周

喰積に気も寂しくて手紙かな　東京 惟草

門松

門松に朝しい夜の鍬かな　一具

門餝

門松や根も古女神の以くさきよき　史千

門松も新まくらかや小縣西　東京 宗川

門松に絵の事風情なる夕暮　、 ちゑ女

門松のあけ帰つて浅間や土産物　日光 左琴

門松に雲より持山の小家かな　日光児歎 知機

来る人も千代に増るや門錺　東京 きく女

門飾町浦まで海手かな　凉谷

松餝

夕暮の錺を取て古し雲錺　日光 積翠

掃ぬもしに旭拝せや松かざり　東京 松秀

春の山に当て見えしかざり松　伊豆 杏園

松内

茶外を年々嫁家かし松の内　常陸 谷従

降音の仍ら殊し松の内　南よ女

客の来て遊び易さよ松の内　羊山

粧ふしき酒旅ふさん松の内　東京　節之

米の加賀の扇流ろり中陀の内　越後　宗飛

松のうち油かけゝし志ん更、　宗桂

子供らの物暑き寒や松の内　文里

若水

若水や出さし山の端に星一つ　自嶮

若水を汲みて兼ねて朝露　東京　曽見

四五軒の若水くみし清めけれ　五嶮

若水を酌く汲みや一汲みく　常陸　古川

若夷

若夷ふんの光宗を覚えけり　丁

掌てし灌摩の供物や若夷　越後　ちゝゝ

以祢つむ

以祢つむや養ひて人の香の色　荷了

屠蘇

咲ひ初めて初空と旅の旅　上野　栗笑

穂俵

穂俵の飛ぶ空に詠めり　東京　亮褐

のし着

うらか秋子旅の香の〆し着　椿海

鏡開

ゐかゝや鏡ひらく空の香の物　日光　石菊

太箸

太箸に手や〆え祝ふよ初春哉　史千

古ぞしと粧ふ人々や禮扇、　蔦蘿

雑煮

箸に清く柴の烟にも雑煮哉　東京　素芯

雑煮らら婉に杓子を譲りけり　東京　荷乙

柄の清く禮ある膳の雑煮好　田兼

大福
年男
懸想文
着衣始
謡初
宝引

子を絶て雑煮の構へも何比危　一雉
大釜の湯わかさと呑捨つるなり　石苻
大福くを呑でかくれや孫所　千軽
とし男額にかけし浜くらべ　東京 小圃
年男豆まく横をして比名残　閑鵬
横雲や此形ところの年男　常陸 范父
懸想文手の寄くる恨かな　南よ女
弓始舞の巻まで読みし亀　木司
鶯の来る間も殊し着衣始　蕉立
十ん寿子を揃へ亀謡初かな　南よ女
宝引の咲く投出や西事状　常陸 杜年

福曳
水祝
破魔弓
蔵開
今年
左義長

宝曳や大黒柱の脇より先　民枝
宝引やりつり出て皆探りより　ちくさ
福曳や思ひ根をのこしおき　来木
福引や持ても面てふ炭俵　南よ女
福曳やかきわけて出る梅の月　雪叢
水祝比情のとましし男なれ　民枝
破魔弓の翔り構へたる情出来　羽前 古翠
呂ちとり襟を着る花見哉　箱波 一甫
年寄しるも嫁が今年哉　壬く
左義長や降止て雪の上　阿字
左義長のあとへ森に来ぬ哉　石苻

餝焚

古家さへ雨ふる隣ても目出たさの　越後　守弘

吉例に庭屋の畑や餝りく　東京　万里

畑所の汐ぶく飾や飾りく　東京　何年

手でくり焚けに結びけり先一人　羽前　友之

旅人のきせる出しんとんとんと見れ　高よ女

とんと

善出もとんとの風に動きけり　知機

萬歳

萬歳や今年も旅の宿　東京　閑山

萬歳や加茂の雨に先立て　東京　太挙

萬歳と別屋に出む給仕人　労兄

一万戸に初く出て今朝の宿　高よ女

右債に萬歳山の城　民枝

猿曳

家内の猿を抱くや代替り　上野　棣く

萬歳の仕舞さへ在所の清き哉　陸奥　祖庵

万歳の見送る兒の笑顔よて　栗笑

萬歳に引きて来て春の様かな　楽水

猿曳をとし残労する所中の形　甫風

猿ひきの雪解を株路の堂哉　越後　巨童

猿引やふんだりけったり猿かな　東京　有月

猿曳と屁気なれ上空　旭丘

身の形も深山木形の猿なれし　常陸　甫丹

猿曳や猿くに春義さして　家紀

手鞠

手鞠つく程に乾きぬ庭の雪　陸奥　黙巣

羽子

作法のとゝのふも取れて手鞠かな　越後　笑畫

立帰りし伴く手まりかな　禾木

紫羽子ゟ井戸の梢落しけり　四筆

女りきるやてんと上る松の梢　越後　貞摩

羽子を見て手毬は遠の御代　古洋

笑声ぱん羽子の字帯まとふる袋　鶯々

着物くも気がし羽子の友　一具

粥杖

宗匠も人粥杖に打たれけり　東京　曽兄

正月

正月の宵森として八日の夜　桐雨

正月や水仙芙蓉の二番附　湖山

櫁かけし正月香や小田の家　昂湖

正月の風ふく海の夕かな　陸奥　蕉丘

正月も見あたらぬ人の数、　新水

窮屈な正月なるや鏡の間　一件

正月や兵燧通ふ煙草盆　羽前　木公

正月の忘れて家は質屋かな　民枝

正月は来てしまふ仏間かな　祖亭

華の香て正月なする柱一つ家　東京　鷺笠

正月や形のうつる依家　越後　文光

正月や立葉に古き立家、　左来

正月もあたりや気らし山の水　千輅

正月も寒さ過ての梅の風、　文扇

睦月

正月やあくてもあれ桐火桶　大貴

下ろ寒て二仏と出る月哉　一貝

昼色の世に[illegible]の睦月哉　椿海

鏡中家内[illegible]睦月の花　月呪

松ノ[illegible]も[illegible]睦月の末　為よ女

出ぎん咲くもの睦月の月[illegible]　合

常年寒都[illegible]睦月の始　信濃　木司

その忘れするわと[illegible]睦月哉　易足

あつ鷲の[illegible]睦月哉　武蔵　貞雄

縄[illegible]の[illegible]睦月の花　木司

をもし此の借て[illegible]睦月哉　玄々

小正月

松を[illegible]柱[illegible]小正月　雄嶺

振舞の先も旅籠や小正月　椿海

初子日

松[illegible]子の日[illegible]　集水

卅[illegible]　十齢

松の中[illegible]松の通り[illegible]　問湖

霞[illegible]子の日[illegible]　為よ女

七種

誰椎を並べて[illegible]子の日[illegible]　上野　之学

七種の[illegible]田舎[illegible]　下野　道雄

七草の[illegible]　凉谷

七艸や[illegible]遠出[illegible]　東京　以吉

荒膝も七草[illegible]の[illegible]　問湖

人日

菜まつりて七州備ん山家かな　下総　兎々

七草の俎まて埜しき今朝の春　旭立

月まちて七草たゝきん板のおと　積翠

人の日やまつ命松も千代をいのる　越後　芝蘭

人の日と思へともまたよく春もまたなれ　素芯

小松曳

立ならふ柳の末をまつり小松曳　常陸　栽星

様しまる真の指ひや小松曳　道雄

子孫に至るまて小松代　五峴

山あそひ貝とりつゝ小松引　陸奥　孫平

全能をきよめしけん小松曳　太峯

小松ひく袖やひとへにそまるの黄　有一

見ぬ方へ人手借るや小松引　角上女

曳とれは松のひきや小松曳　東京　二晶

養父入

藪入や晩そしてし小宇町　千齊

藪入の見て〻四もとる菜園畠　杏國

藪入の背中ゝゝ見え麻子うす　左琴

藪入や炭をつき添ふて宮迄　千軒

藪入や雪路の者も処　以二

藪入の小傘さゝせや登り船　禾木

藪入よまつて席しぬ手織縞　越後　蓬亭

傀儡師

傀儡師信田の森に入りにけり　素芯

世の中を首に懸て傀儡師　陸奥　茶路

餘寒

笠の紐もまだとかで冬しぬ傀儡師　高与女

羽前　寺入の餅搗あてる餘寒かな　正令

陸中　古暦まだ捨舟の余寒哉　可庭人

寒江木のあまる限りし餘寒かな　雄猿

羽後　双六の友肩も出兒余寒かな　石沾

棚重の梅活しに余寒かな　月湖

東京　漁火の影八手えのよみん哉　桐我

冴返

冴返る松に新の冴れかれ　人蔵

きえ返る風もまだ宿の寒　幸雄

春寒

立てさへ寒く雪まて裏の庭　茶静

春寒うる立てる寒寺卯　椿海

殘雪

東京　寒さしさへ落るる小石壁　獺堂

陸奥　人影の寒き残るや後しき　長亥

越後　真寒し二たちくさし橋の影　布席

ちる雪や手前のあとの雑曉　吏川

春寒し消残らも生る尾根の岬　千幹

上野　掃ともゝ笑も歩みて残る雪　雄領

武藏　國饒の下に残るや菜の雪　葛払

秋田　のこる雪残る千菜もおちて庵　文洲

東京　淡雪の清しや九本の橋柱　一幸

淡雪

雪と華の風に消えし波の上　丰遊

雪解

舟廠に錆の峰雪解しれ　一貝

雪とけや捨て行るかやり　妙子
木の根へ淡く出る蘆の雪　丁哉
雪解の淡く通る島かな　東京　乃甚
雪とけや岨の立木もさらの宮　多よ女
ふれ花の市よく練し雪解かな　布摩
雪解を見るハ小雨し家の面　箱館　旭丘
雪解や生きてやくる松　陸奥　量山
負る又見てくる雪解かな　葬母
物解や菜畑の雪の解る　涼谷
小鬼の篭を出くる雪解かな　常陸　草井
雪解や富山を出る菜売　只妙

春雪

雪解するや小春の十五日、　甫月
雪解や掛けの鶴る山の町　湖平
見る花もしめくる雪解かな　羽前　左拳
雪とけや古るる付し鞠の庭　雀堂
舟を出す井の葉ふる雪解哉　玄々
雪解て竹の根もる情かな　祖印
又枝を実ならて春雪解れ　友之
下ちく出逢ふ多く雪解哉　周哉
山里や雪解の中に椿火　梅守
曙る傍ら程を律く春の雪　武蔵　椿海
雪とかく碁打ち笛ふや春の雪　其美

山の客を尋て行や其の雪　松秀
新世めく旭売の中其の雪　布席
其の雪孤葉の蟲の明初ん　下野　一夢
窮屈に降出しまたん春の雪　東京　麻交
其の雪紫をあけて降る雪　白起
焼の跡まし見て降る其の雪　まる記
獅子舞の蹄あくしる雪春の雪　武蔵　昨木
宮に木のこえ降る降や其の雪　乐氷
其の雪紅屋の籏の朝しま　越後　可得
降るるく何よ上る迄大原の雪　巨童
降やらるよりすの上て其の雪　笑壷

初霞

出や井積るやうく大る其の雪　羽前　深月
雨垂と共に踏し其の雪　東京　桃機
焼きけ豆腐の上や春の雪　古川
春の雪竹田の畑けし雪　芳谷
僅しの氣も無く降や春の雪　友之
まろくと鷺を残して其の雪　下総　名お
又文字楪は消るや其の雪　丢く
其の雪降るもるき雨来る　孔正
初霞ん看りても海あし　下野　豪考
香も飛や雪のとけ絶まで初霞　ちくめ
通る人皆良ちてる霞かな　素芯

霞

ぬれ霰かすみの間や兼良剣　一具

三ヶ日過ぎて初子人の手にも扮　雄續

菜畑へ裏引下ろ霞かな　荷乙

竹垣の男捕ぬ様も霞みけり　一蕙

汐風を押通しゆく日出し　羽前　太橋

海人の船遠く出て霞哉　下総　荷堂

大原の下艶わたる霞かな　東京　扇巻

魚舟の手招まはしぬれ霞　常陸　五風

富士の道尾まで霞哉　東京　松什

若餅あらうの出る霞かな　杜年

春霞の口汲そはりて夕かすみ　松崇

明ぼのゝ緒を揃へて手菅霞　安女

遠峯の見る成りや夕かすみ　一夢

霞せぬ方の残る波の程者なれ　越後　巣洋

備前の油脂を霞む木の間哉　布彦

うら白雲を見て山の家　昇湖

霞みけりや森去ぬ杵下る上　東京　和琴

やよむと月の光りよ朧月　大梅

春ろけや酒を霞とわたる口　卓郎

舞ひて見をて進る霞かな　民枝

うちみる人に見えん松と杉　蕤雨

山一つあるは霞の埋ぬ　松秀

つら侘し人の来る宿の片峯 越後 誼光

道も断や峰外に霞 長堯

風上の木々も霞て暮にけり 東京 竣久当

声も聞て鼻に雨なし朝霞 函館 永昇

松枝て庵さへ霞む梵りけり 稜得

波まくし御崎や松の夕霞、 高山

朝夕の霞む麓あり雑木山、 篠山

葉茶屋も手向かさして来て霞哉 祖門

朝の寒にいつも霞む嶺山哉 木司

二日みる筑波へかゝる霞かな 意谷

江に挂て一お出来る霞かな 仝

山里らく楠呼びも霞けり 陸奥 乙洲

霞みたる中に風ある煙かな 常陸 三槐

糸掛の毛纏ひほせ山路哉、 杜年

名なくても仏の山よ夕かすみ、 葉月

物ともいはぬ葉までも染かへ夕霞、 柳美

旅到る松や毎日ふむ霞む 稲翁

霞む夕や森の出おり浜畠 陸奥 仝

葉まで浮く見る程なる霞哉 無戈

村の霞人の丈なと遠になり、 悟好

あこめて又霞けり雨のあと 丟く

悪以の鳥も啼かぬ霞かな 民林

色程に霞みきしむかし阪　道雄

揺ふ子の一群ほとに霞かな　仝

屋根葺の霞にくるゝ小里かな　仝

山つの棟よりくれ夕へかな　西令

生業の白ふ鶴より霞かな　陸前　東樗

汐あしの松や霞の下つかし　下野　素有

日和さして機ら焚火も霞みけり　五峴

東向て舟低き射る霞かな　鷺笠

夕霞義にゆかる木魚かな　乳正

一おきて霞て川のくゝ由かし　仝

霞む世るの兆をに焚火や五加木飯　猶彼　竹岫

世の中と霞みえし山の松、　仝

よわもとに霞を好む小松かな　下総　揚花

小田の窪一尺ほとに霞かな　越後　露竹

あつくも霞てのとや浮踏　李朗

柿の木新伐口にも霞みけり　羽前　梯周

朝りけふ脇もとの水より霞みけり　越後　羽白

炭竈の烟も霞む村嫁　一幸

八景の霞の中や鐘の声　深月

新霞しとれ気の流れ霞みけり　東京　雨村

霞むるや海より暮て帆上り　陸奥　竹里

落陽を出る霞む二人哉　常陸　蚕浦

長閑

裏むきも走る寒路男かな　古川

獨にして出来し軒の霞かな　桃機

草霞みて霞の深き草鞋かな　蚕浦

長閑さの惜しさに隣歩行く哉　雨お

出歩行ぬ人も長閑と言ひて寝　東京 伸女

雛の尾にも長閑のこぼれけり　下総 青峰

長閑さを撓へ出ん小盥哉　一甫

長閑さや脈しく四る燈のさま　葉瓶

尺八のうらすくも出長閑哉　越後 玉和く

長閑さやまるまる撓る鯱の声　一楽

今朝掃き庭平ずよ長閑し　東京 丁女

日永

長閑さや筭てくるる手松島　粟笑

夕からも来く菜や木陰の風舟　葉静

日永なりて起きても長く日の永さ　千甬

鐘も出て長の宿の永る日の永さ　白起

永き日や啼ても鳥の永さかな　一夢

貸借の後催等や日の長さ　多よ女

夕ぐれも長く鳥しきて来る貸本屋　椿海

米搗の棲まてくる日の永さ　亭亦

永き日や来る暄嘩のまだ永き　羽前 ぬ仙

長き日や大きな永き日の人　箱館 有水

永き日を出ゆく庭の煙　斎山

糸遊

陽炎のくはや紺屋の落席跡　蚕山

うけ足ふや以け出根の重きし　常陸　五竹

吟歩や皇妃の近る度半鞋　一幸

かげろふや忘るる何ぬるる垣根あり　下総　帝石

糸遊や古家し炎の炙く蝶々　椿海

糸遊や香気背きる館の中　巨童

糸遊や手折てある紙きぬき　杏園

糸遊や女撫でる糀の町　上野　むさ雄

糸遊や憩ひ茫茫のさちかな　旭丘

糸遊や夢さへ結まん窓の空　箱根　雨蒼

佐保姫

佐保姫の世並ぶや国の空　棠斗

東風

佐保姫や舟の底まで東風吹きて　越後　東及

吹出て吹くも東風の戸口かな　載星

東風吹や大く繕の座敷　東嶠

大津のあたり東風の吹く花　雨村

野の末の東風吹きや東風の吹く　茶獅

東風吹や竹の花の香　麻交

先へも東風のみく抜かれ　逐流

春風

春風や以半へ入向より　東京　大笛

東風や字も吹くも梳の中　基木

芋串の芋串の香や東の風　白起

東風や庭案内を小招き　夜雨九

見し人によく逢ふ日や東の風　ちゑ女

山風の寒き峠やきゆるの風　麻文

うら濡の江の盃立や東の風　東京　八朶

東風や汐の来ぬ寒き磯伝ひ　清樂

葉風松の葉さはぐ日や東の風　陸奥　一峯

岸舟の宿を出しや春の風　ゑよ女

旅鷲て浮き寄しや東の風　久蔵

攫遊を寒き眠し東の風　雁嶺

さるの風仏達りも留主なりし、　五光

春風や人の種を越て眠　ちゑき

東風や中坂登る夜車し　隷く

春雨

梅垣や咲揃ひ眠るの風　貞雄

東風や入船多し潮口　松秀

入相の声も来りて東の風　永甫

人の寄る河を越して東の風　惟州

家々も旅の人や東るの風　舞母

古寺も稀に立るゝ春の風　大費

春雨やあれも上げる用の付る　一貝

紅荘て九て濡し東の雨　むる紀

留る人の出来て東の雨　陸奥　茶静

春雨や稀に庭の浦のなか　一の庵く

桜ひらき外も東の稚雨　体　椿海

おのよりくるまよ扇子降東の風　下総　桂九

春風やあらしけり来四日ぶり　東京　八重女

東風や父の絶えぬ庭の松　陸奥　文呂

東風や義の如く来横ちる　常陸　素考

持ちつる菓子売も来ぬ東風の雨　一雨

扇子借る隣持たり春の雨　松什

菜苗の絢来さえや東の風　尺山

東風や大かたに来し窓の家　交木

芋の根子鬼て流れし東の風　松棠

東風の中にも鶴の折り式　仝

東風や焼米売の東の風　得蔷

東風や袖くるまり小桃竹　上野　松月

東風の井や与平ちる戸の櫂　東京　湖雨

東風の渡る鳥の背中乍　雨槿

一艘の舟の喜を折出しや春の雨　民枝

もび葉てまた雨東風の降るの花　久藏

春風や世縁ちへ折菓子袋　陸奥　桂裡

山ちや何よ手鼻く東の風　上野　鹿太

東風や恋しき雲の竹ちる雪　仝

よくさ毛八ま尽物とまるの雨　川長

東風又且那ちる荘甚の枝　一架

雨儀るともの東風くる洞の家　二晶

新なれぬ鳥の声や春の雨　猗陂 葵雨

二の尼の心穏りきき春の色　不曲

平穏に霧たつ来や春の色　去売

うら若き八木の宵の雲や春の色　棠平

滞さうま垣の並ぶや春の色、　陶烟

春雨の後の月影や小松山、　不流

寒つきとぬ雨戸や春の雨　羽前 乙貞

春雨や白子も猫糠まみれ　越後 葬母

夕暮も簾おろすや春の色　東京 愚本

深し持ち霧てうん春の色　越後 以交

春雨の中よ暮るや一五夜　壺雨

春雨やなびくをそ料理の宵　一昨

春雨の節を告ぬ二の雪　芭角

小窓ゟ隣呼りある春の雨　魚文

内くも猫に酔さし春の雨　漁好

春雨や梅鼻まで花見　左堂

屋敷前の八百屋を待や春の雨　管陂 一甫

花の原の籍釈論て春の雨　西令

夜んもまとし松の木の宵や春の色　梅宇

告去とも様ちるの春の雨　玄々

春雨の滞山きハいなむ葉ぐれ　蚕浦

家相子きんど出けや春の色　玄々

鳳巾

小守も旅と云へりし春の雨　云々

春雨の芽ぐむや桐の花かれ　可底人

春雨の淋しくなりて旅寐哉　鶯笠

蓑掛けし徳利さがりし春の雨　蕉之

春雨や簾籠居る八ツ下り　田菜

葦生えよ大風寒や春の雨　子諧

春雨の降来ぬ日や機の声　越後　抱琴

松くみも人の様やかゝるの凧　雲也

切れ凧や町の中来一里塚　東京　黙棠

乳母が乳を離れし人や凧　文教

見て居れ八舟も静か也凧　南々

若菜

凧の尾より上りし旭かれ　函館　蒼丈

七人が中やわかなの畑色　抱琴

戸口まで雪掃く家の若菜哉　芦帆

花開く物の月出度わかれ哉　道雄

菜畠や若菜摘みし唄声　節之

わかな摘む人そでや袂まで　仝

提げて出し船へも岩寄る若菜哉　羽白

摘みてく採る程伸るわかな哉　雨村

傍らに見る若菜にも似し緑哉　左来

若菜摘む手を松の木蔭に休みけり　史千

雪とけ去るわかな哉　一貝

喰り気なくてゝ摘わかな哉　常陸　一苑
摘て来し人のゆかしき若菜かな　上野　鳳石
姐松の音傳ひ人来ぬわかな哉　松嶋
一つまみ菜芹の径かな　布齋
布里に菜の萩やわれの音　昂湖
清めても香の若菜哉　民枝
内室の手絞に出るわかな哉　仝
雪若菜人手に痩せし陸蔭　信濃　八朗
川むかう向に雪のわかな哉　古振
一日ころ摘行も法もわかな哉　兎さ雄
植飯に春の香して摘若菜哉　斎吉

薺

船帰りて初若菜哉　愚本
折ぬしの香も亦ゆかし若菜摘　箱根　ぬ蓮
あるがまゝ摘たる若菜かな　参機
我処へ夕べあらし薺かれ　東京　一楼
ゆきわけの薺摘し垣根かな　椿海
一本づゝ勤し来る薺哉　桐雨
船に乗け世界の蕨かな　清風
世の中の誰も摘や薺摘　以吉
夕摘へ人もありける薺かれ　三槐
人の味に摘みこぼす蕨かな　南く
薺手て摘て古菜を忘れず　昂湖

出みのみき月出よ女忘るゝ萬代ゝ　卓郎

子をすりて肉刻む男の萩かな　素撲

所々の中でも花さく萩かな　雨撞

俎板の足入れてありゆかし　貝谷

口よりも見ありし萩の萬かな　民枝

荒して手りぬ畠の萩の花　羽後　羽人

竹の戸やまる人萬も萬代抱　名取　秀翠

萩折る者のしまきや人毎　館光

誰植えの花も目出たし萩の花　武蔵　政香女

見上げてもいつ萩の花の萩か　久山

お陣の古池もいつや萬の星　芳谷

折

入る萩や手折りてし萬紫　陸奥　竹葉

萩の茂るや散るる萬花　赤萩

葉の重さに撓む夢の萬之ゝ　仝

穂になりて葉斗りも萩の宿　秋田　玉和く

手ぶりの婚や萩も萬代　禾水

塗き土の夏くも萩かな　大貫

窓から見えし萩の折り　篩巣

志より折って入りし　大梅

風の香の折りてもそうの庭　東京　桃鳩

穂に葉根を交る小萩かな　女　羽人

枯れても萩の折る川かな　貞水

佛の坐
娵菜
鶯菜
下萌
土筆

芹摘むより寒しまつの雨なる　下総 一市

何よりも珍し摘忌仏の坐　二晶

ちらし文賞されし初娵菜　一蕙

摘ましく当るよ冬ぶる娵菜かな　下総 丰園

鶯菜名の儘しさらに賞され　春及

下萌や夕日さしそふ猪の尻　宇鶯

摘捨し土筆の土や怜みくし　陸奥 君山

一枝乳母の衣出て付くしかな　為よ女

咲くくるまなでおちこちや土筆　那湖

土筆も乞食の袋のまくらかな　宇弘

摘あめて席し土筆の長短　陶烟

蕗臺

光りとゝ海辺里の土筆　不流

摘捨て残りし海くも日にかな　薪水

遊びかたに不二とも摘まれ土筆かな　常陸 東止

流れ行く神や法あまた摘まる土筆二ッ　竹秋

会釈する人ぞ戻るや懐かしく　陸奥 おまち女

夕日に新しき家の餅る土筆かな　祖印

わかくはひ芽の摘摘や土筆　梅宇

折りては土筆とはこそ土筆　南枝

世の中をおもひ捨てし忘れし　上野 若水

蕗の薹除てたらの自化かな　碓嶺

冬の畑の土のすきまや蕗の薹　一貝

蕗芽
若艸

蕗の薹ふみてゆくさき忘れけり　常陸　一柳
打解て摘むしき蕗のとう　寸於
世にゝりし古の静かや蕗の薹　思鼓
わつかしき小笹の日や蕗のとう　篤女
山里の寒き来ある蕗の薹　東京　学石
ぬくゝしと木の葉の中や蕗のとう　只好
こゝで摘む懐しき草や蕗の薹　素忠
蕗のとう紫かゝえい折りしよ　羽前　之圭
蕗の芽や春の出ぬる風か　蓬
わか艸や夕和らぐ来しの青　應雨
若芽と芽はえ芽しも世　玄之

福壽艸

若艸や萩笹倒れて摘む萩ゝ　節之
わか草や寝まぬ若の下　羽前　笑文
わか葉にも見ゆの端の詠め　占翠
若草に挿つゝ垂れし承庵　下総　四明
若草にゆゝゝゝゝ兎ぞ飛　常陸　九風
若艸にゆゝきしけふ足代の形　篤女
わか草の人隠れや摘菴　蕉雨
若芽に伝ひ摘みけり　陶烟
わか艸や蔭しめの霞　有水
床の間の姿にあり福壽草　宗谷
蒲團に風に家に福壽艸　李席

木芽

さく等よ附木てゝるや福壽艸　陸奥　曰人

月燈の前く持出ん福壽草　荷乙

掌て土の乾くや福壽草　積翠

条の窓に價貫揃ふり福壽草　一之

日当りと於く欲う花福壽艸　陸奥　乙彦

孫の手て広く上うり福壽草　孔正

節連ぬ姑さん宜や福壽草　節之

梅咲て幾比か来うり福壽草　鳳毛

をも孫付き木の芽の中へもぐり花　芝葉

小冠者の木の芽かきめや木の芽垣　木司

孫ち向て出る節の木の芽哉　左琴

藁の丸く濡るゝ木の芽哉　祖卯

禅寺の詠めに近くる木の先き哉　露什

雨の余の木の芽ても低し木のめ時　笑壷

若無ふ歩る木の芽の葉も木の芽哉　美文

今朝も木の芽張る木のめ哉　鶯郷

気の津にいさ程も出て来る木の芽哉　伸女

大数寄垣彩くや木の芽吹　乙貞

小屋のつん曲る木の芽哉　大貴

とんで来る残の別つく木の芽哉　茶静

爪先へ借の声に木の芽哉　千齊

木の芽や旭さす谷の底　陸奥　三平

梅

佐曲梅へ出る迄きの木の芽かれ　有水

木の芽吹けや深山に流詣　不流

戯れて木の芽を見舞ふ清水かな　烟人

芽をふく張く木の芽れなる世之々　石堯

ふし家の菜き妻も梅を出て黄ひ金　一恵

神垣や梅一まつれ梅の花　谷従

梅の花咲けば花を植添れ　菜静

四五輪を咲きし旁や窓の梅　武蔵　浅翁

悲しくも家なる里や妻の恋　東京　英山

春くるる降くあまりの梅見哉　素鏡

婚梢を帯る軒もうたの花　一貝

寂しくなれあまも梅の花　史千

出迎ふ梅段しり舟上り　鶯栖

風よけや梅にかくる清少　京谷

老人に家あれなり梅二本　一寧

あまた舟乗るに雲に梅白し　黙棠

舟を待あそくし梅を見あり　一つ庵

夜ねよう土も乾くや梅の花　栢樹

朝夕の香我く闇ぬ梅の花　八重女

僧もぬ皇の禁や梅のそれ、　春路

晴るるまくま中の香る花梅の花　涼谷

蓑立て梅花老木を春の笠　椿海

梅の香やよそへもれて座ハ立ぬる　太橋
舟路の名残も出る梅の花　東京　笑語
谷水よりもかくへ白みて来る有明の梅　宗川
梅が香や真とらしくぬ窓より　市石
梅花と梅と並比畑の中　堅栄
淀さしたる茶店や梅の花　陸奥　仝
茶をのむも残むと春の人梅の花　天年
梅ならめ見ん蕨して人なき径の　東京　扇和
梅ほども散し数鳥の梅の香　白桂
梅影も浅瀬老しにごりさる　堅棠
菜種干す梅の香ぞや梅の花　東外

雨ならぬ限りぬ窓や梅の花　下野　嵐翁
宵月に匂ひてうすき梅の花　陸奥　米月
此頃も春の梅梅の花　恩山
若竹も咲ん名残の梅　文鵞
山里は梅に家絶えに宿の梅　瑞年
山の端に月に残り暮の梅　仝
花散りて梅の中より昼の月　一雨
人の顔に障子や梅の窓　仝
月ならで出しや梅の花　東京　五風
梅挽て這入や里梅の窓　抱儀
手桶にも水形や早し梅　太挙

梅の隣の色や李の花　三楳

梅さへ実を嵐あくまで咲の花　女 文木

梅提て餅屋の傘や留守　松棠

うき世の月まで外もさぐり見　東京 杜貫

新の宿乳去や梅の花　白起

客来る垣の内より梅の花　飛鶴

此頃は井の傍廣しうめの花　太乃女

のぼりとりさりなん庭や梅の花　仝

垣柵の中に小梅や梅の花　得甚

[illegible]の梅咲ずして仕舞ける　麻交

晴てよし咲ける花うめの花　八朶

梅と竹の外なくうめの香　文来

手まりをもて梅ヶ枝の作風　南く

梅さく枝こそ中にして梅の花　仝

梅の香も清く姿旭かな　一夢

山里の庵稽古し梅の花　仝

梅咲や物の隠れぬ住家　陸奥 信永

咲きしの梅の盛りなる谷の華　李州

手枕の夢にさめける梅の花　松月

見上る月の暮や垣の梅　栗笑

曙も風情あまりの梅の花　仝

梅の花ふる中の村にて見る　布廉

鶯啼の家やもあきて梅の花　陸奥　文肖

草庵に残りし鎌や梅の花　竹是

喰かゝる菜のらし家や梅の花　志琥

大根の干場さし来る梅の月　ちうき

ちぎれ竹の縄も解けて梅の花　大貴

焚ことも真清すりし世かふの梅　仝

梅か香ゝく來かゝしらぬ人の乱　川長

鶯のゐ伏屋もありて梅の月　下総　錦哉

君か宿は苔もはゞける梅の花　葛松

茶の汁倫まぬ家あり梅の花　棣く

節ゝ穴も嬉しきも嬉しし梅の事　萬由

山里の冬籠嬉しき梅の花　松秀

よき梅を皆ゆかしめや梅の花　澄堯

鳥羽玉の夜の柱格妻の花　不曲

梅か香の風の香を写ふ雲の花　永思

梅拾ひし梅の雫やうめの花　渕燕

誰か梅の香持咲てもし梢川風　如蓬

住もの手に水盛て梅の名残　石狩

梅の香や絶えふて木綿雑　惟州

ふ二と梅と鶴系猿や旅の初め　箱館　龍化

ちり急ぐするや雨名の梅　藤流

梅折りに行やくの庭の舟　旭雲

紙燭してよるや跡の蕾ひ梅　也雲
梅咲て桜もあるよ寒さかれ　華母
村中ハ霞も香して梅の月　雄嶺
古寺となりし月の行合ひ義の梅　茅九
如し世ヶ月岡の流くや梅の花、　上野　亀半
行先の不二も白う梅の花　阿兮
蕾さへ香の情あり梅の花　芳叢
京過なと寒く梅ぬ梅の月朧　羊山
梅咲や夕暮毎に松風し　千之
一息して梅の香の梅り哉　松井
梅咲て揃横ふる畠かれ　東京　易年

猪植に葉を焼や梅の花　一之
夕暮でも煙なる窓の梅の花　仝
ちる前もちんと流れる梅の花　夕山
是からと中入つのうえ　只妙
梅の花覚を神と仏なり　常陸　南石
松さらに只新しき梅の花　微孝
梅の月朧し上手静也　東止
寒の花雨の木立り梅の花　古川
門叢も換桜ものや梅の花　越後　月ら
山里の下駄も新しうめの花　芳谷
梅さくや隠れ家も望一重　雄嶺

牛の行畑もつゞきのかゝ花の華　稲所

梅か香やきのお家立し序　仝

かをる月菜曜か雨ふる露かれ　仝

六里来てはる星なし梅の花　陸奥　五壺

梅咲て帰りしまの句ひ哉　竹秋

妻咲も松造りと思ひけり　芦月

盗まれてましし梅の匂ひ哉　友之

雅の来ぬ折に来て梅の花　丟く

古梅のかきねきよりまつりと　仝

小城主の梅の葉月や様通　雀坐

せまりて居宿の春しや梅の花　仝

梅の香は代築不老寿で梅の花　芳翁

家々や十ゝ九つゝ花の宿　羽前　涼岱

義しき梅の宿りや二日月　道雄

梅か香や舟も流るゝ道なし　仝

かね咲て月よ春の浮く姫来る　正令

宇め折て仲町吹くや手習子　仝

月代を剃て出るや梅の花　吟霞

一月の雛月や梅のそれ　五竹

世の無常も知らで閑出家梅の花　常陸　尚古

鶯居も無常や梅の花　一陽

梅ちりて花の上に散る垣処哉　函館　一甫

梅の咲家に他人となりて庵　五峴

白毛の自ら隠れし梅の宿　玄々

花嫁の見合し梅の寒さ哉　仝

挽かれし梅に見おや茶やの妻　三捲

ちらくに和舟上るや梅の月　抱琴

料理種みな通手梅の花　羽後　松怒

梅さくやひとつこその宝の坊　之生

ちり果し梅に傍はく月影哉　祖庁

梅咲や声を覗ければ足の音　蚕浦

摘みけて見かくる梅の小家哉　仝

石の道又ゝ家風とふや梅の花　祖庁

寂しさといふ物も来て梅の花　鴬笠

名所よ極むまで起せ梅の宿　素芯

梅咲て雲のとおりし山家哉　孔匹

春の雛子入る稲荷の梅赤し　仝

粉器の手はくや梅の花　節之

折あとの梅寒し漁師町　田善

おもひや梅に夜明く折ふし　黄丈

旅人の足を垂まるや梅の花　仝

家くて梅の香る叢の透り哉　赤琴

出おりは茶く島の梅　武蔵　仝

枕かて川を渡や毒の花　可秀女

梅形ましき二代ニ人のあり　去く
咲く侭杉ニ入ぬや梅の花　越後　了く
ともしと見ゆるや梅の花　蓮亭
春とかしや簪帯る庭の梅　蚕浦
梅咲や雅荘も酒屋も新酒　仝
梅の花匂ひを盛ん草紙哉　水戸　岱翠
う然着の梅さしらぬる杉之庵　卓楼
針枝の梅一つ咲くに咲よられ　岩水
梅を柔菊と梅の出しられ　其斎
菜の中に付て見えても梅の花　ちらう
嗅なるも香りしよ梅の香　玉和く

薇物をも留竹のさしるや梅の花　羽前　二丘
手よるも折るも早し梅の花　仝
家居て偕乾け梅の花　笑壷
咲くめの塔に龍刻男り家　越後　二洞
横作も浴しる留主や梅の花　驚笠
梅の月たてし札杉を森ふ咲　巨壺
あらの本をやうく新でしつ梅の月　古翠
梅咲や宝藏の蘿きし閃い掃　千略
為月より立つるし切そし梅薫る　東京　休圃
戸咲きハ梅の匂ひの動く之　陸奥　庚年
梅ちるや小くりしくと秋の青　山雄

船の月梅よこつくるた遠あらし　葉路
朝起も人まれ乗せ梅の花　柞里
畑の井に鶯まずまず梅の花　周然
一二人舟うる出るや梅見連　田蕪
清水しと雪掃く窓の梅　禾木
客舟に梅の宿や貸ふとん　ちゝう
掌にまるて梅見の使ひ哉　仝
梅の香る内や梅花のきりしま谷　森浦
春雨や暮しみ梅の香る棒門　大貞
梅の香に鶯来て嬉し梅の花　陸奥　竹龍
先梅の立処名乗や梅の花　大費

野梅

田の形たまる風に梅の花　仝
梅の梅や梅に二のあるはよし　昨木
尖る枝も花く折らぬ野梅哉　斗園
客をまつ雪や野梅の一つ二つ咲　乙負
蕎麦月や二月しまつ野梅哉　月岻
雑木も花先へ折る埜梅かな　仝
梅の梅に月る春あの野の内　東京　粗平
野の梅に尾経を頭を折る花　民枝
曲り様の色のあまた野梅哉　石荷
野の梅やわ尾り猪の折ぬし　常陸　清平
菜こしに白ふ野梅や比叡風　田茶

白梅

梅白し丹波の雪の降る日　一雁

しら梅の影すゝる氷もなし　羽人

白梅やとゝまりても去人の香　壷半

白梅の静しやその闇夜し　八重女

月落て去る猿も斗籤かな　常陸　雅柳

しら梅や旭出たの壁の穴　笘舘　鷺宋

白梅やその息出る一つ月　李朗

紅梅

来てみれと白梅の後く春の跡　蚕衛

紅梅や夕の絣あふるゝ丘の光　社年

紅梅や畑見通しの情　彬子

くらきにや笛吹き去る竹の庵　旭立

柳

紅梅や座敷ゝ明る八重の月　笘雄　松率

玉簾や紅梅の香濡るゝ　五岷

紅雲や折も散るとて濡るゝ如く　凍芥

紅梅や利生尼を一の客　秀竹

紅梅を紙で積ふや寺の庭　梅雪

枝ふりよ雲表出よ柳かな　雅柳

月の出て松の伸て梢かれ　芝葉

紅の戸の柔やゝ比も出よ柳　芳谷

月出けや柳芽をふくつの　稲酔

歎きの綱を荷はる柳の影　仝

傍笑の来つたる柳哉　木司

青柳や下ゆく水の薄煙　下総 桂芽女

飛ぶ鳥に動いて行柳かな　竹葉

傍らく光る庵にかゝる柳かな　雀堂

揺つるゝ足跡ゆるかぬ柳かな　宇魯

余所の田へさし出かゝる柳かな　荷乙

古きまゝ人の住まぬやしきかな　宇魯

行違ふ屋根舟時雨く柳かな　凉舟

浅黄幕茶の中に芽吹く柳かな　五岘

嘘まじや隣の柳来て打つか　下総 吟霧

すわ芽るすぐにて近き柳かな　文廣

鬼新の船に乗るる柳の雨　一市

立ちそめし色は柳の零かな　文和

蕊の雫もつるゝゆらぎかな　上総 寛里

枯らねばならぬは我が柳かな　五岘

大柳中なる枕もまた中へ　玄々

屋根葺の結び上ぐる柳かな　羽前 ぬ旭

足代の躰にも来柳一つ所　梅周

ぬらりくらと柳乗る柳かな　羽後 如光

芽柳や南墻さ染めゆかし　了応人

隣地を見て掩せ柳かな　仝

多年泣る人はふ千の遠柳　蚕浦

和歌よそふ人もよしや桜の柳　仝

まうふ物二月にも高き柳かな　鶯笠

何処捨てのせんさく芒有ハ室柳　素芯

燕のくる程ハ来たり柳の芽　仝

一夕に木の芽くばるく柳哉　捨海

壁よりも乳母のつきり遠ふ柳かな　節之

自ら落ても蕗くつくし柳かな　仝

ぬくる色を拂ふて柳哉　枩序

少しうく風の青楼やよ高よ柳かな　四筆

捨よくも東の眺めて柳かな　乳正

青柳よ来人町の稽古かな　凉谷

嬉しく種のむくは柳哉　一貝

誉しくもなくもかなる柳哉　一桜

四五軒の出変ひて柳かな　桐雨

立春ハ二ぬるみ廻る柳かな　黙葉

落まるゝ見えわかる宿のはる柳哉　一ツ伴ミ

生て抜く家の葉焼の不見ゝ哉　八重女

二かめながれて出来もハ柳の影　一挂丸

居處まで隠れの通る影の柳　一飛

青柳よしては雛くりをかの月　越後　十箱

生け花の中へはし出花柳　宗川

青柳やふりむけ見る落日枳　扇巻

川上の流も見る中柳哉　仝

え節の花ま涼にて吹る柳かな　笑語

二里来てり昼飯どきの春日かな　黙巣

船着の声より動く柳かな　五湖

折られて井戸の底なる柳かな　思山

一節にすらの見えぬ世なりけり　東京　松什

流れ寄る舟くる気の見し柳かな　杜年

簾にして持たせて伸る柳の芽　謝堂

鉾にまよふ名の笑し春の乱　杜貫

まだ柳や流の薫し乳上り　其抱

乾く間に枝の離れりやけにけり　其笑

柱にもの其膏をかりや名柳　乃堂

大名の屋根をも紙の柳かれ　麻交

牛の面押して通る春日かな　荷月

民屋の流れて縄手のやなぎかな　狙年

大名の貧しかくさる柳かな　布齊

青柳や庇からさる春の影　為女

まだ柳の木々を物なし田の社　仝

深くても持つ川手の葉の柳かな　鼎湖

まだ柳や川流れて雨しも香の音　下総　大梅

流舟に一日来しやなぎかな　狐米

青柳や新地の川ながら柳かな　卓郎

舟の出てゆく乳さへまるる春かな　民枝

紙前の風ふ揉くるゝやふよふれ　陸奥　萍水

青柳や羽織ぬきし土手の上　三平

青柳や傍信房の外流し　常陸　よし香

明安さき新く吹きて柳かな　素考

立ちゐしく寄りかゝる柳かな　幸雄

奈前の見とゆる一つ家哉　ぬ仙

若柳や近江に届く荒鳥舟　貞雄

見ゆるをへだてし並べし青柳　長表

青柳も宮の前なる寐覚哉　永栄

雪の梢の中に見ゆる柳かな　松雫

物くさく茶まで見る柳哉　楽水

二羽連れの来しかゝる柳かな　大梅

帶けして柳宮の青柳かな　紫井

青柳や面と向ふて中青　文光

面の井時ならぬ芽や夕柳　仝

手待ちに制札もよむ柳かな　羽含

小雀家の葉樹あらし柳かな　越後　西阜

稲むらを右に影見て柳かな　千軺

素人も柳をさして通り道　双二

一二軒たちや町を攫ん柳かな　桃機

うけ葉やの場実をもみする柳かな　仝

柳をも動くやまでの日和哉　南枝

此星の下に定まる柳かな　南枝

伸るほど月に流るゝ柳かな　古人　雨考

八ツ門も柳の春の一ツかな　汀允

行もとも笠そらしても柳かな　大貴

業火焚煙のあくの柳哉　仝

陸天の雲んで暇くや春の代　蚕浦

陋屋に棲中や柳の一枝より丈　未司

出る舟の戸へ吹寄る柳かな　乙貨

東風吹や揺き柳に梓まくく　陸奥　梶乙

何処からも見えて家居の柳かな　雄嶺

旅人の去くして月出る柳かな　東京　應く

何も無く一枝ぬれる柳かな　蘆羊

流れゆく本も志らく柳かれ　茶径

青く細る雨の青い寿しかれ　上野　田鳥

乱杭の中に月出る柳かな　貝谷

浮してから雨も止らぬ柳かな　椿海

抱く家に柿保家く柳さん　守桂

復初に流しつる柳芽ぶきたる　赤英

挿柳

松花

下州の茎で更のし松の春　八重女

以つまでも積くや松の花　松付

中津の花川水の昔語りか絶　東京　里竹

二月にも逢へてねとしや松の花　雄籠

一ツまだ見ぬ椿の蕾かな　仝

傀儡師出てゆけあとに散る椿　松窓

笑地ちるに春よしも同じ椿かな　田巣

折よりも花の少き枝かな　梅雪

一ツ枝よしつゝ開くる椿かな　文洲

義の椿あまり重ねけるに咲に亀　鳳石

下手の双六負ぬ花椿かな　涼谷

黄も無き程持て落る椿かな　素楪

つまきしき咲て雪降山鳥かな　涼谷

音絶てる椿みもとめる椿かな　懸巣

匂香の流れしかるや赤椿　仝

椿

松の花月さくかたへ枝移り　麻文

十代の老根をぬけ出し古椿より　八朶

餅つく音のまつりや松の花　蔦蘿

田毎作る醴店や赤椿　夕山

掃よせて雨に打るゝ椿かな　常陸　素丘

笑白に影ある枝の陰を見て　応雨

雨晴て戸口へ落る椿かな　哥谷

蕾に有る時も家の椿かな　陸奥　楽三

一月も見て入ル椿かな　木公

ちり出て椿まじく小窓かな　道雄

葉の色に掃や日向の赤椿　玄々

志ら人の名札を結ぶ椿かな　八重女
屋根の上ちる椿ありけり軒の内　桂葉
咲ぬ子掃あつめて無常をしる　米月
中絶てまた一枝はなさきけり　祖印
家餅に椿添へる塔の切紙　得楚
まけぬ花を入れて椿て来椿かな　卓府
経蔵の前にちりたる椿かな　古斑
手折ては義木染へしき椿　ちりき
枝おもに花乃天井ちる椿かな　羽人
西月の光山家の障子か椿かな　雄花
あふ傘の真をとほる椿かな　文石

落椿

物先ありあまる子の落して椿かな　一雨
…の底ととまるや椿ちる　桐我
掃こしそれよりのち咲ぬおちちる椿　三槐
落ちてからの月称子来し椿かな　乙貞
おちてこ程ちがふも古の椿流れ　北荷
石段より落る程落る椿かな　川古
赤白二つ椿も落りけり　鳥湖
あかりより見るもこゝろあて落椿　乙綱
咲かぬ間のなかで作をくれぬ落椿　芳石
地より落て志るや椿の咲憂　玄く
ゆし棹つゝみて拾て落椿　鶯笠

猫戀

外様の家にも出や落椿　陸奥 南山

猫の恋果てゝ縁ものけ淋し　東京 瑞毒

時候もなく寄もはるゝ猫の恋　谷従

うら枯猫何か物を忘れけり　蕊巣

猫徒の先まはりしてき猫の恋　方居

月呑にまかせ腕行やうら毛猫　遊流

大船も浮きぬ夜なり猫の恋　謝堂

猫の恋むらくと風の北になり　麻交

さゝねくの内よりとられん猫の恋　帝席

大川を中に恋ふやまとまる猫　高女

ぬるまぬく寄りまゝ毛猫の恋　禾木

姉上を出さきにもれ猫の恋　花父

日焼して帰も出る猫の恋　三平

無住寺の人なき猫の恋　旭丘

恐ろしき雑役なきしか船の猫　不由

家もあり起きたる夜や猫の恋　万里

枕にも帰きれ猫の恋　阿守

此方や女猫のくるま大ふとき　月呪

恋ねこや式部も雨に濡も澄し　常陸 雲樂

浦なきもおける猫の恋　簫和

不思議なる物なし猫の恋　嘉月

呼かれ猫や燈子に向ふ月　蘆帆

白奥

五器の内妻子もわするゝ男猫かな　素芯

罷出る声もはるかや猫の恋　五岷

猫の恋屏風の内の寝覚かな　四篆

恋猫の踏こし庭や白小袖　岩水

面影にすゝめし猫の恋　鶯笠

通ひ来て此家の猫と啼きけり　全

下駄足駄裏く中や猫の恋　濱扇

一寸のしのびやすしや猫の恋　四篆

恋猫や畑中にさえの池　梅雪

友達の来れば調る猫の恋　宗川

恒滅して土器や根来膳　付孫

百千鳥　鶯

しら雲とはなしけり井の梅の花　湖山

白魚の鱗のうきしや松の蝋　以莖

百千鳥山も曙るゝあれさ　花甲

鶯や西も東もの子椎ともと　丁考

うぐひすや難判ちゝもとの里　一皇

鳴てみよ鶯みね池のへり　史手

鶯や御堂の中に世を下り　涼谷

飛あつまる鶯ぬけて音ある声　鶯孫

鶯や七ッ所切通し　南濤

うぐひすやかし狩に来むと鶯ん　桐雨

鶯や障子一重をはるもなし　一具

鶯や小首かたけて鳴きまはれ　桂巣
うくひすの口の梅にも生えたる　一蕙
ちつきまと初鶯や神の前　八重女
黄鳥や一声ほしき朝の形　東路
鶯や余所の寺も出来ぬ身の振り　桂巣
うくひすも一声紅の不二の山　一蓋
黄鳥や我と旭の出る梢　妙子
鶯や城気を持てる庵の垣　方居
うくひすは出かけて藪や日の当る　十鶴
鶯や鳴ても鉢や出し　合桂
黄鳥に初音のまゝる枯木かな　五湘

黄鳥や古き柳ろん垣の外　桂巣
鶯や振くゞる垣の奥　越後　一の英
垣蓋ね里や鶯のあしきて　仝
鶯やちゆんと子供の襟まで　桂巣
庭さくや鶯杉をかすめて鳴　瓷翁
黄鳥の黄鳥来るの梢から　松什
鶯は鳴や二羽来て二羽かへる　抱儀
うくひすの初音や新を返して立　大宮
黄鳥や尾羽そよく新のきく　古挙
菜種屋て鶯鳴し根岸哉　何年
鶯や出れも浮ね舟の側　麻丈

鶯に起て加茂まで来り庵　荷竹
鶯や盃まで例てあく　八朶
鼻出して鶯鳴や枸杞の中　仝
うしろ向て鳴てすさるや一歩法く　南々
勢向の止鶯の声遠これ　一夢
鶯の二羽来て一羽たつ声で　仝
鶯の勢森の鼻をこしち庵　栗笑
鶯の喉こそあれ羽振り哉　呉洋
鶯も来ねば雲の悲山　布席
出来ぬ鳴鶯声きくも吹く雲　南よ女
向ふに鶯の声あく立場哉　仝

よし芭蕉分けて鶯うたすみれ　鴎湖
鶯や法の川振子小半日　東京　氷谷
鶯の一つ鳴けばよく和しけり　久蔵
鳴き捨てて鶯庭を遠くかへりけり　禾木
鶯の初音聞きけり妙諸延　半丈
うぐひすや菓子を備ふ神の経　民枝
鶯や新も初音をふくみけり　碩布
鶯の柳をわたる橋の宿庵　文胄
二つ来て鶯二度の花の声哉　日人
鶯や柳に月の枝移り　幸雄
鶯や神の出張を町経るまで　ちゝき

傾くと思へば鶯の夕声かな　大貫
鶯は又今も見ゆる古葉かな　旭丘
鶯の啼捨し家は初音かし　葛松
うぐひすや丸まりし捷紫薪　ぬ仙
鶯は鳴の餌さ西晴く　震翠
鶯や鳴て来るも家のこと　松秀
うぐひすまかりし這入障子かな　仝
振舞し鶯一里く後　松宗
鶯の餌来う糞来う竹の中　曽彼　雨明
鶯子手を加へし行木の宿かな　花甲
箸もちひてうぐひすうてく花ら売　等蓬

鶯や飛て来りし谷の声　木司
鶯や傍のわく松の葉仏　瓶乙
鶯や又も山路の古巣隣　雄牧
鶯の来て立蹴ぐしたく竹　政勇女
うぐひすや障子明けば二声目　石符
鶯の息さへ帰る夕べの庵　東水
鶯を喚て紫を衣褥竜　昨木
うぐひすの下手な折ふし初音かな　九岑
鶯や雁くるゝ池の上　羽前　松和
黄鳥の白き尾見せて去る音かな　二丘
鶯や立つ竹の子垂れ体に　陸奥　甫山

鶯にたまたまあり茶の出花　英虚

う清字黄鳥聞く小雨かな　西阜

黄鳥の音や宵まで光る月　一陽

梅に啼く鶯もなし笑ぬ花　内菊

雨晴も黄鳥やまり竹の色　一陽

鶯や小庭発聞く声もなし　一幸

鶯舞て啼鶯や一里塚　深月

黄鳥や枝折て近よる其の音　千桂

鳴さゝ家鶯くる鳥の跡　双二

鶯や何処て捜ても其初音　文洲

鳴ぬ時来る鶯も肥る竜　桃織

鷽

黄鳥や瀬々に分く青葉　葉路

鶯も飛んで小白にもみぢ茶の木かな　禾木

鷽や声も羽ならし枝と枝　蚕浦

鶯子逆あつまる山家隣　吟鹿

うかれては掃除へ出て帚かな　仝

木槲や鶯尾にさへ鷽の門　涼谷

出て見る山のさとうかれの峰　布席

鷽啼や鶯続の隠る墓の土　角女

うかれ啼や娘粧の引く椿の梳　民枝

浮かれて摘む梅井姉し鷽の声　如蓮

鷽啼や絢織に濡し山の乳　梛鳩

雲雀

堤家の川揚り汐や鶯の声　曽彼　雨明

聞るもあまりつゝ雲雀の揚るかな　柔静

舟の艫の柳子揚るや揚雲雀　大山

操る舟や雲雀で雲雀の鳴通し　一具

月代の制ふよし鳴雲雀　里舟

見えてもうそく見安きあかりかな　高よ女

春倦かておの気に入りあかりかな　臼人

川堤の浅ふくも走く鳴雲雀　貞雄

大空の雲雀出てくる下向く飛　松秀

茅の葉を出て戻りよ揚雲雀　霞翠

橋より見る雲雀もうらめし橋の上　守弘

舞中より鳴くは揚子の雲雀かな　政秀女

鳴つゞける咽喉めしみ気下すた雲　荷乙

我の雲雀声をさへ近子揚りける花　陸奥　峰洋

除きて雨に往舞や揚雲雀　汀尤

ちる花は己も夕し鳴つゞけ　柳美

燃揚の中より見あく雲雀かな　芳谷

かへりの下上る雲や揚雲雀　凉蒲

とまる人も声は禁や鳴雲雀　梅守

下る舟の心地さへよ舞あがり　寛里

雨気はく日和も雲や舞雲雀　仝

先家うく見てそも舞ふや舞雲雀　如旭

麦圃の二ケ所並ぶ雲雀哉　箕笠
下り路のねむる處し落雲雀　蕗之
音のみ続く廣野や舞雲雀　仝
登りきりて雲の上ゆく雲雀哉　田蓑
昼の静し落る雲雀あれ　吟霞
夕照の一際高し揚雲雀　太貫
大空を踏まへ居ても雲雀哉　芭角
性急に生れ付きし鳴雲雀　四明
地の網離れて高く舞雲雀　山雄
近ければ雨降ても揚雲雀　雲也
来る雲や雨雲を切て鳴雲雀　蕗之

雲雀さへ新に鳴けり籠の内　吟霞

駒鳥

駒鳥の鳴や霧たち千尋の谷　芝雄
笠着ても包みて行く駒鳥の籠　棲海
岩迫る極みに駒鳥の声　風石
駒鳥や藪を出ぬ山の朝利　菁莪

蜆

蜆売新の茶屋に得つ干なり　小圃
大鳥の蜆売りと鳴なり　抱儀
濡れし手の袖にも入れ蜆とる　布席
連れ立ちて蜆とる子の赤くなる　蕗之
ねのならし一息したや蜆売　宗桂

蜊

浅瀬して事の業子に蜊とる　雄嶺

蛤

海苔

松風に口あく物か小はまくり　雨芳

蛤や生るゝ声く黙けり　拙角

蛤や風よりはなる人の夢　梅堂

海苔舟や海苔にまたも一の家　一の英

海苔あるの松原にふる磯松かな　遊休

春の夕でも消ゆや松の光ひけ　以萱

月代や海苔切りくと海苔のよる　希齊

香かしや机の上の海苔一把　万里

松の焼る間に鉢るや菴の家　星山

ふるさとの新海苔届く頃に来る　梅亭

口上のうちに自分や古き海苔　陸中　大樵

御忌

松の灰や家の宮中の夕月夜　節之

人の上に集る寿や御忌の鐘　初雄

御忌の日やさしけれ娘の秘かな　一薫

津雪も地に落ちる御忌の鐘　每亭

嗄るや縁忘さるゝ御忌詣　信紋　一甫

〇

藪入や小性乳飲みて袖につく　東京　氷狐

右ゝるゝ人に逢ひけり市の中　仝

休まふと思ふ万事も今や不二の山　武蔵　吐香

松風とわけてまたは春の風　陸奥　梅渓

春之部中

二月

稗蒔て旅人ふゆる二月哉　碓嶺

まだしても雨降雨持も二月哉　茅九

田の面に雲の流るゝ二月なれ　東京 片々子

萌戈の庫裡ゝゝ這へ二月哉　忍斎

山風に連て行つ門二月かな　杏我

かなかのかつ空を霞る二月哉　淮美

山よりも先に粉しき二月かな　荷堂

蛍数へ雨霧去く二月哉　椿海

衣更着

鶯や梅が出るまでとる二月　雉周

衣服ハ春を日数さへ二月哉　子晴

二月すも別て旅るゝ雲ゝ形　文里

幸く其の霞しき安き二月かれ　芝葉

手紙にも寒の古き二月の形　武蔵　秋臺

乾鮭の下に置投出し二月かな　若月

如月や我肌で見えぬ人の家　仮好

起こし虫や揺條の底しも内田　市魯

物生く如月の風るいもゝ　文廣

如月や角力の器し余雪松　涼谷

きさらぎの松義しまで入日かれ　風人

二日灸

如月と云ふよし月の畑に寄　湖堂

起こし安き大路通る山の小舎　布斎

衣更着や森ふとんも能仏　千里よ女

きさらぎ袖や米の宵待もとの杉子　星谷

如月や西川が橋の小舟出よ　呂湖

楠の根の石を残りも二日灸　下野　笑経

旅先に人ゆかし二日乳灸が痛　布斎

二日灸風邪鬼さへ人の娘よ竜　田菜

初午

初午や魚屋集まる月桂代　涼谷

大作年頃ひとり社の手代　栢樹

初午や松でもらす大般若　吉備　一甫

旅僧や宿かる初午太鼓哉　月暁

初午に持遊ぶ花世を走る秋　東京 世婦

きのふ午や持人の雲ある叢の中　大梅

初午や畑の小家も神あそび　素樵

さ津午や去ぬ頃よし浜の町　松秀

初午や綾取子来る畑はなし　万里

さ先生を一里様にも織ぬらん　竹是

初午や屋敷しの人語　道雄

紫の花や初午らしき器　梅亭

さつ午や小盆ふるく店の剣　重々

初午や子をも抱て角力見る　仝

春月

初午に相撲の貸座の月見哉　二丘

梅の木に持まし春の月夜哉　薪水

山もよし梅もよし春も月もよし　夕山

又入る西のにほふ春月夜　山笑

家雲て雨に梅て春の月　素之

駕籠の花を乗りけり騎子春の月　葉月

夕暮のあたり浮かんで春の月　月下

春とはいへ月は光るや二日月　芝茶

振袖の咲きしけやし春の月　桂菁女

裸る一日桃やさるの花　芳帆

春の月霞しうちに野も眠り　芳月

人音もたえてあとゆくし朧かな　素芯

朧の月一日ふりし雨の上　楳海

出女が燈の影や朧の月　友之

船宿へ傘来ぬ先の朧月　仝

きるものゝ絹籠に結ひ上る朧　涼芳

一面に睡るものや朧の月　西令

何となくみもむやむや春の月　文廣

群しる初雁春の月　下総 雨花女

山つゝきの影や朧の月、　一甫

なくは来ず雛なくや朧のさく　梅序

総しく思ふに謙し朧の月　秋臺

薩摩の名までは(?)や朧の月　節之

氏神の鐘鳴りし朧のさく　四叢

朧の月大寺の前に称名　昨木

本坊の窓まで春の月　新付

紺網の乾き時露し朧の月　里東女

柔かき川尾そくきるの月　休圃

梁様も鐘や朧の月　月峴

狗人の浮き朧の月 松武　涼谷

雪消えて町くだし朧の月　一楼

朧のかけ軒の携ね町屋哉　妙字

以さよ紋の瘦も見え朧の月　古橋

ある土紀わ柄ふやや春の月　松付
小松堤らたいと虚飛春の月　五風
不那為子鏡を出ける春の月　千扇
海の雲もたれてくるや春のよく　貞把
山と海の間より入ぬる春の月　麻交
何ふより傍く出ぬる春の宵　川長
春の月縄麦子出んぬ乎哉　扇よ女
壬生村を畠の中にまた春の月　昂湖
笛船に味噌樽まやと春の月　萍州
篠月て来人をし雑り春のそら　五光
春の月高峰も跡ありくま　宛郷

春の月香炉の角は五処哉　古威
欲のなき越びゅくく春の月　篠山
堅ちより薬研来りて春の宿　藤流
きあき家の字もき道より春の月　恕雪
照せては梅の間はし春の月　祖印
旅籠屋へ見ね旅して春の月　武蔵 角く
石となり竹け上けり春の月　蕉壺
春の月高齢へまい消さりま　李朗
と合の藤の笠つゆる春の月　丸旭
燃る家を取へは味噌くし春の宵　羽公
山里にはほ籾もみて春の月　路壺

朧月

艪の音も四つ過るや東の月　杜質
貝売れ海も明けし東の月　桃機
葎からたて出る窓の月影　陸奥 作る
山の鐘さしてまた花兼て東のそら　四眞
あの條の縄のくるるや東の月　古樸
人ありく鶴や田にむかふの月　風石
木も艸も自ら神の朧月　惣水
あの條の朧にも見えず朧なき　常山
あなたなる舟絶えかや朧月　常陸 文翁
湖の月も朧になほ欲しき　甫山
雪ながらの松もかすむ朧月、　石竜

朧夜

迷ひ出し後に河原達朧かな　芦月
株上の常のこかや朧月　桑二
またまや四五寸上の朧月　霍堂
揺籃に掛子もとる朧月　芝雄
梅の実をつて花立ね朧月　菅波 一甫
社祢の角もともなく朧かな　正令
あるまじく朧月秋の扇かな　鶯笠
窓尚の枝桜あり朧月　田第
三日月も月の朧や海の色　寄付
朧秋やあらし出る小桃灯　民枚
あかなしの秋や楼木上手寄人の来　墨本

春夜

三日月の西を織のさしめぐり　李席
蛙なく堂の利をね織らる　如機
繍朧や並んで山に消のまゝ　庵雨
春の朧や埠の杉さへ霞みけり　寸丸
さくらの朧や竹の都のちらさんて　鳳湖
春の朧や門ひらき庭の梅　久藏
京の朧や難波飛脚と船に乗て　貞雄
さくら花夜を律しく蝶に似たる哉　常陸　昭貫
春の朧や里の鐘の鳴る声　下総　一甫
春の朧や幾の雨帆の光　深月
さくらの朧や朧夜の袖かへ人さくる　李朗

春宵

行燈に出しておくや春の宵　某有

初雷

初雷や忘れて籠る寝ます　千船
あしれはまたの雷の光りに　東京　あいの女
降止て初雷跡を一ツ鳴り　鶯卿
古鐘や麦伴雷の後に鳴く　有月
桜かとて初雷や風呂の中　杜貫
角風そうなた雷と思ひしも　以黄

出代

出代や頭ある夕縁延ちかし　荷了
出代や旅出るや手紙を覚　亥女
出代や若ひ勝る哥の席　下総　寿池
出代や兄弟ありて伴ひ来　祖竹

彼岸

出代の芸揃ふて来て往古哉　汀丸
出代に一口よせん梓弓　常陸古人 呼友
出かはりや先手掛の髪しまひ　芦帆
出代に本の名を呼ぶ男かな　芦月
出代の去りし人多し舟と舟　節之
出かはりや座てかたすも暇乞　仝
出代やかはる夜寒も暮しかて　南枝
荒畑の大根ぬきて、ひかんかな　草升
町内か木戸建替る彼岸かな　夕山
蒟蒻の玉霰に出るひかんかな　呼友
御まゑ近く見し彼岸かな　湖平

ちりかゝる梅はひかんの入日かな　芦帆
蕗の芽のおふておけるひかんかな　五晄、
瀬し塚へ物売に来る彼岸かな　正令
彼岸とて餅に梅ちる夕かな　素芯
萬請し畑見すはりひかんかな　二丘
彼岸から接ふ子作や焔魔堂　美文
飴売に七つをきゝひかんかな　垂浦
屋根葺の皆に名とくる彼岸かな　管仮 湖平
夕暮に旅人となるひかんかな　一甫
川縁に鉤を添るひかんかな　仝
香はけしや彼岸参の人の手　古城

涅槃

四月おと人の出て来ね涅槃かな　一具
俗とも云へ八俗とも泣し釈迦ん像　仝
涅槃会や手あし包まま峰の雪　雄嶺
香ちる孔雀遅きも来るか涅槃像　魁棠
涅槃会や火燃し後の煙の星　椿海
月となる明りゐてかり釈迦ん像　羽前 乙孫女
涅槃会や足踏連て濱出り　多喜女
像待ちすま風の上る釈迦ん哉　石符
釈迦ん像衰き香の煙られ　斗延
橋守の薺葉摘ん釈迦ん也　恕雲
菲妻の杖帯哉探る涅槃哉　貝谷

岩かげに見つけ出たり釈迦ん像　笘彼 一甫
涅槃会や人をゆかせて切烟草　下総 一笠
人の命の義しさや釈迦ん像　甫石
手をにぎり佛しく朱や涅槃像　陸奥 石上
其中にまた夢見るや釈迦ん像　家竹

西行忌

花遠て餅粮蒔や西行忌　石上
えびの毛の筆掬うし西行忌　小圃

水口祭

見たるも祭るおはり山の雪　旭丘

田打

一畝に打とり居て田打かれ　雁塗

畑打

帰る子の飲ぬ畑打　妹塗
畑打の傍に去れや墓の花　二丘

初虹
春日

畑打や森林に近に鷺る州　陸奥 南山
畠打に何か音るや下り舟　管城 一南
打ちより捨つる音き畑のあと　秀兼
畑打や神酒備へく稲荷堂　陸中 一毛
畠打連待合ん宝ある哉　指掌
子を止よと畑打呼や坂の口　大梅
脊戸畑や打て居るん帰り佐く　不曲
もの虹の跡の経るや津くし山　栢樹
初虹や旅人思ふ船とまり　有月
通し矢の名残なりけり春の虹　天山
山門の並木揃ふん春日哉　雨よ女

春水

乳泣て皃のやり春る哉　里竹
春の夕やけを借りよる丘の家　寄竹
春雨の気凝れくる春る哉　呂壺
夕暮を淋しむ物や春の水　湖平
戸口より潮の満ちや春るの水　蒔之
母持ちね子の淋しかる春の水　涼谷
冬ておやくちる稲るや春の水　桐家
旅笠の紐浸みけや春の水　栗笑
桂女の中に流て春の水　雨よ女
村木の舎千尖るや春の水　陸奥 仝
凡情の一度をしるや春の水　奥人

春海
春川
春山

はるかなる畑の形や春の水　一具
春の雨になね家もかゝる花　宮彼　一甫
ちる花水釣くる鰹の渡る之　素蝶
流るゝと汲んで流る春の水　羽人
小原女が草鞋洗ふや春の水　篠山
春の水芋にもよる川流も清　竹彳
菜畑の及ぶかぎりも春の海　一笠
霞とは帯なし春の海　キ山
春の川鵜の飛んで来るゝ之　一石
ことさらにまゐるも春の山　亭鳥
春生の霞むや春の山　深月

春空
春雲
初花

旅立のゆる気鏡なく春の空　一皇
花物を後にしけるや春の山　風毛
落ちかゝる雨に浮くや春の山　一莫
春の雲春つゝ光にゆりまくる　太峯
苧の戸や何處に春でも春の雲　ぬ蓬
遠やりへし揚る春の雲　大梅
初花を積もてゆり東風　二洞
春の花や樹新の五六尺　尤琴
初花に婦る雲は蕾結ぶ　梅守
春風や母の中に出生　九岘
初花の雨尋る一人かね　大梅

初櫻

本城のさくらも咲ぬ曙哉　艶僕

初花や憐出して呑気な菜　烟雲

よしのにて通りかゝりて初はなに　英山

月ありと雲に惑ひし初の桜　信高

初桜様子見にして思ひ立　香泉

阿波在東京

云ひなりて来て甲斐も浮ぶ初桜　月岷

肩の法にたよりて初はなに　多女

桑なきのふの白や初の桜　島池

菜花も咲く桜に淋し初桜　立曇

姫も心を枝と見し月や初さくら　一毛

初さくら咲けば山の宿かな　下底人

糸櫻　咲き分の様や糸はなり　多女

接木

此頃に形なく来たる接木哉　庵来

接木せる人や若さを似せて見　英山

惜しみて数多に入る接木哉　麻衣

臼の目を頼みや接木にまかる　昂湖

あやに亀小刀として接穂哉　壮年

接穂

継ぎもとの傍にて接穂哉　野巣

垂なる気を付けし接穂哉　総巣

接木して手元へ八分月　五風

出来て五方の花見る接穂哉　民枝

先帰りの時切れる接穂哉　大貴

挿木 苗代

風吹ば何か動く挿穂かな　羽人
猶強のわきて見ゆる挿穂かな　雑周
試みにさし木移して後まで見　東京 耕雲女
苗代や将も出あふ花丹波山　芝葉
苗代に移る古代の若葉かれ　玄々
あちらしほや神の鳥と出る見えけん　仝
苗代や見なれし妹が加減　竹岫
あをやしろや夜も見えぬ風の種　てる女
苗代やゆるみし李　桂蒼女
苗代の見えて何とや山の際　源谷
苗代や一隅移す木の根　大貫

種卸 菜花

雲雀も小唄ゆえて種おろし　麻交
菜の花よかへる末る小春哉　萼莊
菜の花や茄子の苗に雅楽　笛彼 雨明
菜の花や黄積丹の忘れ哉　不曲
菜の花や何処の垣の里迄も　松秀
菜の花や入日遙な丘の東　羽人
菜の花や裏揺る乳母の家　川長
菜の花や家々の雪ちる　ちゝき
つ向の菜の花咲て麻布　了是
菜の花や霞して花巴　城汲 蕉古
菜の花や菜の花も村の見る町　素蝶

菜の花に霞の海ゆく帆かな　為よ女

菜の花や遠く雲の行衛哉　以竜

菜のなかに菜の花見ゆる女かな　麻交

菜の花やまさに生れし紙作り　杏園

菜の花や名ある紙漉作りのをかしさよ　栢揚

菜の花や家の内の人は静　東京　井米

蝶々飛んで菜の花にかくれ　稲所

菜の花に白き蝶々の乱れけり　北妹

菜の花の咲や畑の流一筋　光琴

菜の花や刀根の川辺の一続き　道雄

生垣に菜の花交る野の宿　仝

菜の花の中の細道や大津近　雨花女

菜の花やなくても海のね根と霞　鴬笠

菜の花や家出る春の蝶の織　菅波　双之

菜の花は八重に咲くね根を指す　赤英

菜の花に麻の立ならぶ林かな　尤未

菜の花や這入ば松見ゆし　双二

菜の花や菱売回るなる雀　竹了

菜の花の暁をきりや山の水　斗園

菜の花に今もくくの家の花　四明

菜の花や神の宮出ん子の嫁　雲也

菜の花の奥の縁の立や石祖神　垂浦

大根花
虎杖
早蕨

縄張のうちまで咲や大根花　一雅
藜より虎杖高し節の数　乃董
手蕨や松ほる丈く握りゆく　素考
比かつひの山菴雑り摘ひゆく　菅俊　而明
早蕨や坂の内まで山の紙　易足
ますらひや杖杖極の山まさり　陸奥　而童
岸て居る乞手蕨摘る岨の人　素芯
初蕨の為我らく一把され　節こ

蕨

一概手伴て嫁るわらび哉　雁臺
山ほりまでも折るわらび哉　床水

獨活

獨活あり事まりする名宝哉　棋海

蒲英公

鮎ゝだとゝかゝ蛇く雉鳴ひ　二丘
此程の我子哉ならぬ蒲公英哉　卅葉

麻蒔

蒲公英も乞ふも落て麻の種　涼茂
麻まくや擦の曲く丈婦達　友来

種芋

種芋や返ふく雉の鳴もよる　雉嶺
とし寄の扇られ世話や芋の種　旭丘

杉菜

内庭へまる我荒込杉菜哉　雉嶺
垂出ても空きの空き杉菜哉　月岷
作りもの似ぬ足あし杉菜哉　布席

菊根分

分て居る菊の花ならず宿哉　香篆
菊分るかまも見かまでも旅支度　南よ女

菊苗
芦角
芦芽
蔦芽
艸萌
蘩蔞
春草

菊苗や人にまかせは仏のみ　雉嶺
蜘蛛の二股かけや芦の角　八朶
芦芽しや氷りさし人蒲も雪　丁寸
蔦の芽ほ秋の心のうかれ　左来
打雨の出来くもわや草萌る　椿海
松越は落る雪も浅し草萌る　謝堂
庭ふみ出し人ぞいましくる哉　秋臺
終日も雲弘ねて浅し春の草　鶯笠
其の册桂く見え草々もわ　庚年
菴の猫草を世尊も染んし　古川
草のよ浅しく磨ける鹿や春の册　笑壷

畠焼
山焼

焼野

春野
燕

焼るね山されや煙の色荒畑　布席
山焼の明りに滞や古畑内　多よ女
焼く山のうかる浅や草鞋とく　椿海
山焼の山傘にや浅の船　道雄
君が代の烟かゝり山もなく　雨考
月新に小さる影ぞ焼野哉　下総 蜀鶯
去ぬとてもなくるる焼野哉　若月
焼の名雪に消しも此あり　玄々
山越に人くる焼野の花　巣乎
浅き谷の根る萩に遊ぶ春野哉　帷艸
萩の先にも来るや燕哉　野巣

折釘の碌紫をこそみち菜の花　谷従
乙鳥や絲付くなる粟田口　一具
もる月に剥てよく鳴る菜の花　亭谷
去年の巣に一寸落つく乙鳥哉　古橋
花見るも田舎に赤ね燕かな　棲海
乙鳥の見え去る宮地端の茶屋　大笛
夕濱や先づ腿見えて菜の花　八朶
巣乙鳥に人立寄る日の跡　布摩
菜の花や傘の隙なる切通し　留よ女
菜種屋の店組れん菜の花　了是
乙鳥や四五里隔てて来荒ぶ　幸雄

須戸籬上手に入る乙鳥哉　杰古
明る朱もありけに乙鳥なれ　陶烟
五六日宮に来ても鳴る菜の花　積翠
今来ると思ふ家に乙鳥哉　竹ゝ子
晴れて出るに来る雨か初菜　去く
物干に羽も濡らしの乙鳥哉　呼友
燕の他家に見えぬり知らぬ事　道雄
巣をかけて四五里道入菜の花　皆俊　一甫
乙鳥や手前好も此るより　名村
息つめて来て見えなる菜の花　不乃
夕菜谷の底までも広うなり　素芯

雉子

梁ゟ海の橋りて鳴乙鳥　千粉

菖詩中構を備る雲雀哉　てゐ女

面影や棒下まるてむし蕪　古撰

藪ゟ雉子走る枝所かれ　竹里

雲雀やつて機へる浦の岡　蓮亭

谷ゟ出て新や小山を越る音し　抱儀

岬風に走りうてまぢてきしの声　遅仿

鳴かけて雉子の出て見ぬ荒一つ折　嵐齊

聲龍昇の霞るあしと妙しの色　有月

夏薬尾も高きあらば雉子の声　月峴

矢をはのかし飛ぶる雉子また見えて光　松巣

山の寸くあくあ雉子の切て飛　大梅

うるの上日見えれ雉子の羽音かな　三平

並松に雲のふくや妙しの声　守是

青の野の中よりなる雉子の声　大貴

三尺の中律の林やきてしの声　孫哉

心のまゝ胸に生きしや雉子の声　不曲

雉子鳴や撰まも住ぬ人の来　雄嶺

鳥つの石橋たしる雉子かれ　一臭

代りの宿をふくあやきしの色　野巣

一畑出りて織れや両の雉子　抱儀

里遠えて及ば来ぬ夕雉子　菊枝

おりおりに鳴や夕立雨の雉子　市石
きじ鳴や秋すゝき山のくれ　昭眉
雲くもる曲寮の徑や雉子の声　稲丙
野しるく今更山の夕くれ　常陸 有山
山ちかや厠の下のはしりの春　亨雪
明け切て後も鳴く雉子の声　道难
何先を立てまぎあやきて雉子起　全
あの白て松ちらし雉子の声　尚古
雉子鳴や戸隠の山の[illegible]　陸中 葉中
きねくの雲晩はく見まし[illegible]の声　一遊
古竹の底より雉子のあらわれ　玄々

野の雉子夕くて出たるも[illegible]　全
野きしよ夕もの麓を見え[illegible]　奄湍
雉子鳴や今朝くゝる竹の間　秋壑
きし羽かよふと頭出して雉子[illegible]　田善
鳴くる鵜山の雲やきしの声　帰丸
[illegible]山野[illegible]鳴や[illegible]雉子　鸞開
雉子鳴や岩根の底の行[illegible]　不衛
月淡て頭出して雉子の[illegible]　其濟
野の雉子草や木々[illegible]　ちゝ
[illegible]雉子は[illegible]鳴　雛周
今鳴くきじと遠[illegible]雉子　四明

歸雁

雉子鳴や此雁も此の古戦場　東京 伯丈
見へなき立雉子声もなき花　仲女
きし帰るや人の立の鳴る人拂　蚕浦
塗の雲も離し来や帰る雁　茜谷
紀なきも嬉し帰る帰かな　丸兆
時節またやわかれかへる雁　木公
遠山よお帰る音や帰る雁　添游
嬉しきて帰るは雁もかへりけり　一陽
またもや鳴る雁の後にも帰り雁　巨童
雲以後きまのくしても帰る　禾木
旅人を見るて帰るへかへる雁　鹿太

行雁

月あかりあかるく帰りかへる雁　羽人
たのしり向き来ての月の暈　鶯巣
行雁の物をなき花ぬ花残　東樗
ともしての家来て雨の雁　玄之

雁別

行雁を共に立ち学ぶ旅かな　素芯
わかれ進める入ぬ人の影　仝
おもふもの声なくらお帰る　千之

春雁

来て後さるか雁のわかれかな　越後 椎嶺
春の雁月の出立遠ざかり　三桃
人もりく北向く春の雁　体圃
遠出来て雁の帰る中春の雁　乃益

春鳥

親雀

雀子

春の夜の笠着る傍て送く歩　角上女

芹なへて風しは旅拵て夷の戸　鼎湖

所町とて石切音や夷の家　松月

木毎ちる雨に独るや夷の家　古川

高い木に浸向ふくちらる鳥　常陸 文洲

群ち寄る動くや夷の家　穏野

蜂しれる声て子ち呼雀かな　葛莊

巣立ち子さへ呼ぶる雀かな　雨槿

雀子の一際あかる隣さまれ　何来

すゝみ子や芝をくゞりて飛ぶあかな　ちゑ女

やれしと小松くあかね雀の子

ゑえあの子見て来りゝ雀の子　麻江

日数経る鮑鰯や雀の子　角上女

風枕蕒の気の毒さや雀の子　民哉

以つ死ても訳よふ来る雀の子　以蔵

菜のけや雀子あかる雀の声　五峴

拾ふりくえ取呼雀ゝ集　仝

断て狗瓶借るや雀の子　梅字

明への飛手に托して雀の子　秋蛍

手に集まて餅を拾ふも流雀の子　字桂

餅をもまけぬ去て仕舞ぬ雀の子　西右

蕒物も一年あまや雀の子　蓮亭

孕雀
曳雀
曳鴨

梅か香を隠す桃に孕雀の腹　二丘
雀ゝや野の面に出て雀の子　民枝
引や鴨若葉に糞汁　丁斎
帰るとき忘れて別れ鴨　永谷

鳥巣

山の巣に糞しよ園に巣なる鳥　素芯
鳥の巣や枯木集めし美しさ　示水
鳥の巣に隠れて寝る哉　布席
鳥の巣にあふもうつる山の雲　東京　雲球
巣の鳥の親子揃ふや木の上　芳莚

鳥交

今きて鳥を藪に捨つる　てい女
来る鳥の林の中　伸女

初蛙

松の風きゝに来たや初蛙　蕉雪
鶴寝に出たやきの蛙　竺雄
一面にはらはらと啼く初蛙　素有
能さへて寝ころびけり初蛙　蕉然
葉の木をわたる様や初蛙　糸よ女

蛙

瓜切りも書るやうや夜の蛙　以芸
蛙鳴くや寝ても一聲二聲　雄鏡
あるを隠れぬ通る蛙一つ飛　一之
捨舟にすだくと鳴蛙の聲　嘉月
掃て置く通るにまたる蛙哉　友之
川音を寄るきぬ夜の蛙かな　元琴

畑を四すに横ハ倒かゝる鳴蛙　芝雄
以く夜も落葉に落る蛙哉　一乞
東から星こく初る蛙かれ　梅可
夕蛙あかや田家の家ハ留　春浦
萩茨に飼子来その花鳴蛙　挽琴
行きも拾ふ蛙とふ之底の岩　一毛
飛く尖て池の月のや向蛙一つ飛　梅関
蔦の苔山家みゆる尾哉　誉笠
母ちやし鳴止蛙鳴しのかな　苫之
鳴きて緒目淋しき蛙かな　田筆
以つもの蛙鳴出るやたゆむ哉　其摩

初蛙

初の夕こハ六かしき来や初蛙　落牙
鵜籠に鳴しやまつ蛙　芝雄
一回浅く鳴絶へたり初蛙　素石
能く夜さく籠しき出しや初蛙　慈厳
葉の末を絶えて雫や初蛙　多よ女
瓜切るも雪ふる夕やまつの蛙　何蘇
蛙鳴や寒くも一声二声雲　椎鈍
宵ふる声に雨透る蛙一つ飛　一之
捨舟ふきくと鳴蛙かれ　嘉月
帰て昼る通りにたぬる蛙哉　友之
川音を聞て蛙のゝ来　危琴

蛙

畑を田にする程ハ鳴蛙　芝雄
以く夜も宿ハ華やかる蛙哉　一毛
東から星さく神る蛙かれ　梅亭
夕蛙家から田家の家居　垂浦
菱茂る湖に来ての花鳴蛙　艶琴
明きて捨てし蛙と見えて處の台　一毛
鳴くや夜も月に向蛙一つ形　梅園
霧晴山寺を登るるに尾哉　鶯笠
舟ともに鳴止蛙鳴ての濡　藤之
鳴き出て錯向淋し蛙の声　田華
以てもたす蛙鳴出たる夕哉　其摩

鳴て来て竿の中より鳴蛙　桃機
月も向かひ似合ね葵の蛙の声　鶯郷
休見田に初手から聞き蛙の声　伸女
霧晴れての蛙志る下男　今
淋しげに寿て蛙ひとり　雨村
丈擦家の古き中帰蛙　鳳毛
井ともなり羽子に飛行蛙哉　一之
乗りて行けハ鳴止蛙かれ　芳谷
鳴すのの挑一里より蛙哉　甫枝
大根の花喰に来る蛙の声　凉谷
飛声や鳴もせなく夕蛙　野業

田一枚小庭にちしや鳴蛙　大山
おしく蛙あちこちなる菜庭哉　月峴
草芥や蛙よけくく人の跡　千翁
鳴あとて帰りし蛙草の上　三槐
井のほとりて来りて田に閑るや蛙鳴　一雅
啼きやみて水に染や家の蛙　白起
草卉て[illegible]ふ家の蛙の聲　李州
月夜き休まりつくりの蛙かな　布席
夕暮は仕分けの空に鳴く蛙　多与女
田に鳴けば義くしも鳴く蛙かな　半廷
出ひきたるよそ見をするや鳴蛙　旭丘

蜂

蜂巣

濡ながらむしろ雨を[illegible]ぬ蛙かな　雲翠
行とも今は蛙も鳴かぬ菜種哉　夢々亭
更て猶大世界さ鳴蛙かな　不曲
降前寝ぬ[illegible]蛙　為蕎
静くに林末ねむれ蛙かな　石甫
本城の木の穂ある台や鳴蛙　谷従
出律をも梅を抜る蛙哉　文来
絵かける[illegible]る軒のむかし蜂の巣　杜年
釈あるや年何もや蜂の巣に處る　第侯　一甫
一つ出て又ふたつ飛や庭の蜂　浮月
蜂の巣も松[illegible]とみえてかかる也　雁壘

虻 蝶

蜂の巣や村の出口の地蔵堂　梅周

竹の末てらりんや蜂の塔　布席

蝶飛や子の寝て居る上り端　菜静

石のつむ邸中きらふ虻蜂哉　小圃

黄昏や蝶の出入る大仏堂　涼谷

蝶の中古葉とんで来るの花　陸奥 仝

蝶むとの飛ぶく集めく蜂の城　東峰

華髪の高子姫くやゐる水辺　以交

蝶くきを蝶の追ひ行く花の影　東耕

足もとの山も暮りけり蝶の花　一雨

蝶群や不見とつゝえて海の沫　仝

杉もとを飛ぬけ来る蜂哉　月眠

蝶群や網子も香もね蝶の者　松白丸

蝶くくにし飛ぬけ合せし出入哉　其笑

蝶飛や塀柵とりの屋端杉　以董

蝶とりて?くるとひの立る日哉　麻方

杉の陰?くのくの飛ぶ小てらり　清水

てりきえて戻りも賊まりし飛　罘笑

近付の中子舞の立蜂哉　布席

蝶とぶや仏檀の灯も昼下り　南屋

てり群や様子ちゝる米初穂　民枝

蝶群や不二の?の根子手ゆく　陸奥 写年

武蔵野夕日しも於蝶哉　大貴
蝶とぶや屍を並べし浅ひ隅　暮松
ありし女蝶の離ね小柴垣　蕉丘
大船の帆つ出るよ蝶の舞　樗々
水を越えけり蝶繋しく筆の笠　維老
初蝶や雨のもてくる海風串　不蔵
黄昏る蝶の舞して永年ち　李石
枯芦の中に枯るるや蝶の花　田福
菜の葉蚕巣て女飛ぶ蝶　量山
蝶とぶや花の上に移て行も　松月
てふとぶや衣の襟女の紺時雨　羊丈

蝶々や浮て来る桶の底　蒼谷
てふ花や晴揚し小春也　稲洲
桃さして隣まで起こさする蝶哉　木同
蝶とぶ新しうて宿りけ　芦月
蝶々の労悲しくも雨一日　玄子
てふてふや小庭に入る存掃除　羽前 雀堂
山椒の芽を嗅て来る蝶哉　井玉
追はれして追ふてる出は蝶哉　玄々
蝶々よ夕和かしく漆一船　仝
蝶とぶやつめ里往来の名　田巣
酒桶の底も干や蝶とぶ小蝶　仝

菖彼

田螺

蝶飛ぶや雨持雲下り　双之

てらし追ふや雛の小塚を塗ぶり　ちゝり

追ふや人に給ぎて出小塚　キ山

あらゝも犯の古き郷の塚　鶯郷

鉢まけの一茎に乗て蘇る様　井園

給ぶ葬の唐行放てなぶ　禾木

塚しや草山こつて海こして　梅亭

地のてら豚来坊布もた藻の形　古拏

唯見もる雨鳴や月に田螺鳴　芝雄

松山に夕ぬけて見なて田螺なり　昭木

此とらしも中まで見見上田螺妻　学井

鹿落角

なよりも春の畑ぞ田の見し春　杏一

落る月や田螺鳴く秋を昔の名残　桃鳩

見え上の形の鶏がね落し角　雨ゟ女

妻恋に出て落し見ん角の上　六貫

能る見る畔に訪て人や落し角　玄機

月能の身に落しての角　量山

鮒鱠

田一枚置て喰や鮒鱠　椿海

備るとも春もあつし上肴の腥と　第彼　素封

ちるむや日暮て来る文　仝

学の来て汲み鳥とし雛二對　仝

春之部下

三月 弥生

三月やおもふこゝろなき海の雀 太梅

私より陸甲斐や弥生の軒廊 應雨

何者で孫や弥生の雀一羽 文洲

雛鯛に招きに行く弥生かな キ山

燈の傍り結ぶる弥生哉 若狭 一甫

雛

亀甲も以て浅き弥生哉 雛園

雛の皃人まつ井より晴る哉 蔣水

這子まで来て喜んで雛 汀花

雛さへ[illegible]宵の切剣　夕山
[illegible]地も[illegible]紫　若帆
昔[illegible]も[illegible]ね[illegible]　十六女
入れ子雛の[illegible]　文和
[illegible]の[illegible]雛の白[illegible]　云く
[illegible]雛[illegible]山[illegible]　仝
四[illegible]四[illegible]　簪笠
雛の[illegible]合[illegible]　越後 文鵬
黄[illegible]の[illegible]　昭眉
雛市や[illegible]ね[illegible]小人形　芭角
[illegible]の[illegible]柳[illegible]　石上

手[illegible]の[illegible]雛　一具
雛の[illegible]　仝
[illegible]古[illegible]　和琴
[illegible]雛[illegible]　一雉
[illegible]雛[illegible]　沙蓄
雛[illegible]　麻交
市の雛[illegible]白[illegible]　布席
[illegible]宮[illegible]　南よ女
手[illegible]の料理や雛[illegible]　仝
[illegible]雛も[illegible]の上　天年
[illegible]雛の夕[illegible]　久蔵

雛合

買ふ人の雛を並へる扇かな　桂程

娘の手紙来信に撫る雛一つかな　大貴

子の為に買ふたる雛の膳　川也

雛の間や浦島太郎か聟めく　羽人

燭並へ清うて出すも古雛　宇弘

紅の棚や粉食ふる雛の人　惟孚

三月の間ほとにも雛は一人哉　篠竹

借りてある雛の雛の息　二晶

子等急に雛の座敷哉　雄嶺

鶯付し頃や鶯なり　田兼

鶯のまつりにかへる斗之　三拙

汐干

旅人の寄りて拾はる汐干かな　芳谷

汐干るや先至る刀哉　丢く

住吉の野鼈を見る汐干かな　田兼

汐干るや居りてもまだ汐干哉　石女

手傳ふて煮焼きする汐干かな　鶯御

神風と吹く阿る汐干哉　素志

八丈もこちらへ汐干かな　茶鄰

汐干精出して拾ひ拾ひ哉　清風

夕暮も帰る右手汐干哉　有自

二艘にて帰る汐干かな　浮竹

戸を押し汐干帰りの隣哉　麻交

春霜
別霜

一寓に鐘の出て行汐干かな　氷谷
舞衣の舟に風香汐干かな　素樸
深川を池に面偲汐干哉　斗遊
高山連の葉に残る汐干かな　大貫
人影の松にも似たり汐干潟　松秀
大き男松かとも見ゆ汐干潟　永影
若く梅とふく人気色の霜　城陸　文鬼
松葉ちく老の夫婦や春の霜　美文
繋ぐよ鞋捨て行や朝の霜　嘉月
宮守の庭掃行やあの霜　戴星
菜畑に寓し二寓霜まぬ別霜　斗玉

三月
弥生

雛

春之部下

三月やおぼろ〳〵と鳴雲雀　大梅
むらさきの径甲斐や弥生の野鷹　應雨
何ごとも春や弥生の雀一羽　文洲
雛網に掛もれて行弥生かな　キ山
雉の隙ありて弥生かな　名残　一甫
亀角毛咲や飛鳥来弥生かな　雛国
雛の良人の世話はや弥生　蒋水
這ふて来て声高ふ見んむ士雛　汀尤

雛さへ淋しく見ゆる宵の切刻　夕山

於子ある地も九重やひなまつり　芦帆

着てみても出すや数もしれぬ雛かな　古ゝ女

入相に雛の影悦ふ夕かな　文和

燈火の影ふりかはるや雛の顔　玄々

おもふ事しらぬ雛の座も淋しかりけり　仝

四ツ五ツも四日ともしれぬ雛かな　鶯笠

雛の日浅くも見ゆる家の町　越後　文鵬

若草の野にて寂しき雛かな　昭眉

雛市や賑ふ袂に小人形　芭角

むかし桃の花咲く中に住かな　石上

手を尽す人の手跡や影の雛　一奥

雛の中に家の嬉しや古伝ふ　仝

並べてみれば嬉しさ見る雛も有　和琴

陰にて見る人身し市の雛　一雅

灯ともしてかの香りに雛かな　乃蓋

雛も黒び目移の裾の二つ三つかな　麻交

市の雛有月もうつる森の鼻　布摩

活けかわる家ぞ宝の燈一つ　多よ女

手家気者の料理や雛祭　仝

猫も童雛もまた見ぬ枕の上　天年

寝見ぬ嫁も雛の夕かな　久藏

雛合

買ふさの雛を並つる扇かな　桂程

対の手紙気係よ並ぶ雛かな　大貴

一つの若葉見るかの内り雛の據　川光

雛の日や浦屋呂屋も新めく　羽人

猿並べ律を出申して古雛　守弘

むかし棚や粉食等も内り出ん　幢子

三月や悉くも雛よ一人ぶ　篠洲

侍くる出そ隠るや雛の良　二晶

旅の急ぎの一つ雛の度成　雄鎮

踏付し所須くや鮮ぞ　田兼

鮮のた志んよりかえる斗　三秋

汐干

旅人のあまりむかる汐干かな　芳谷

汐干るや先達する力あし　玄く

住吉の松笠竃るまよ汐干かな　田兼

汐干るゝ屋しても𛂞く放く𛂞　太母

手伝ひて者焼きする汐干かな　常術

神風と出ふ所河る汐干哉　素芯

八丈もゝゝゝ汐干かな　茶輔

汐干時子を拾ひて拾ひ𛂞　浩風

夕暮を陽に右見律汐干哉　有月

二帆てし𛂞く帰る汐干かな　治黄

戸を押く汐干房つの雛𛂞　麻交

春霜
別霜

一霜に鵆の出て行汐干哉　氷谷
築ゑの舟に風香汐干哉　素樸
深川を池に面像まで汐干哉　斗遊
あれ迄の芦に残る汐干哉　大貴
人影の松にも似て汐干潟　松秀
大もの松のも出る汐干潟　永景
志ら梅とらへし気先の霜　城陰 文鬼
松蔭ふく元の夫婦や春の霜　美文
舞子に粧ふ綿やわれ霜　嘉月
蓮もの盾掃わや春の霜　戴星
菜寒さ二霜森すなや別霜　丰玉

桃

干柿の味やらくとれの霜　尤陸
笹舟に似たる雀や春の霜　文嵩
桃の香の上にさしり見るまま霜　常盤 薪水
折てくる桃や鳥雲に三日月　素白
被足くさるの文や桃の宿　素有
芭祖拜達して三千年の桃の花　宇秀
出嫁や乳母を服け桃の花　芭雄
笈負の舟の傍やわれの庵　正令
刀差人も折て行くうれの花　吟霞
桃さくや古丈抱の庭に家　梅宇
鶴鶴の褄あくれし桃の花　玄之

万葉さへ鼻でもうけん桃の主　玄々

糊子箱をふむ子も打つ桃の花　二酉

出し抜く桃ゟ森の林一ッ家　鶯郷

折もおらでそれそく枝より桃の花　仝

浮く桃や杜座敷で詠めけり　西村

山寺や猿の子出て来桃の割　亨枝

鵜飛して月見付たるもゝの花　玄々

もゝの蕊菴の燃くすむ遣らし　法風

かし海女の助や桃の茶筅　谷従

御賣る奥や濱辺の桃の花　大山

上京のゝもゝの花　前堂

櫻

梅の香ををけつとや桃の花　其兆

屋根替も牡丹燦々や桃の花　よし香

舟借りて行や春の桃の中　幸雄

桃さくや見事よりとも料理茶屋　万里

本字法家もうつり花桃の花　旭丘

余寒のある花浅連れて桃の宿　椿海

本縁屋の寒さに浮や桃けり　丁台

一條あけても見る桜哉　史千

雪とも見て桜さへありてゆかし　小園

頼りしかけ内や手も押さ手桜　墨栄

よしのゝへて見て見こね座代　梅儀

よし野や花も匂ひて散る桜　霞糸
草の名のあるは桜の木の間哉　三槐
庭にある初午に咲く八重桜　八朶
散るになる木の残る桜かな　桂浦
此里も野を賀ひのさくら哉　久藏
後ざくらして咲る木も桜哉　井筵
根桜や古木なりけり散初る　貞雄
桜ちる日をしめしや鐘の声　旭立
小原女の見るまゝしみる桜かな　仝
紫竹の雲に上野さくら哉　羽人
散るゝを見るの端し桜さく　鉾哉

花去て遊の志かる咲く庭かな　岩機
ちる桜すゞ風臭す筵かな　松井
咲くしと桜に志ほむ出誰哉　篠山
風の松の残し風情や散桜　仝
散るまゝ咲に朱子二度の桜哉　子之
咲くらぬ日も夜にさけて咲哉　菜徑
羅漢寺の桜雛寄る雲かな　有月
雛の志からも咲きけり散にけり　松白丸
庭桜か昔ゝ見る桜かな　よし是
三日月や桜かゝりし跡さき見　不曲
桜さくを津わゆく人に逢ふ事足　里虜女

明星の志んと締まりし桜かな　吏川
蕾もと綴る竹々の添し哉　呂童
竹で程月の入易き物を添し　兀分
小原女の白き手あるる桜かな　如旭
川捕手て手をかざして歩く桜哉　南山
大寒子桜を盗む月夜哉　陸奥　二洄
旹夜中社寺の遠通る桜かな　旹羅
月見や雲附くて浮紋竹くて哉　雑周
きうい咲きたし根の真砂暑さ哉　南枝
手津向し人あて下戸くちる桜　西阜
独登も桜の中よう津々哉　キ山

山ともよきしくとる桜かな　雨村
見てもはりでの中にも桜哉　竹司
枝のぼりて蔦青ちしき橡の上　抱琴
ついて見　大かた元から花のつて哉　四明
葉蕾月に継しいて咲る桜かな　大貴
山の雲枝を桜に通られ見　風石
入相の桜中かきん読まつ　一之
折くまをまうくらや桜時　仝
[illegible]
結うて見上ぐ待たる哉　蘇水
小嶋縁の雲に桜と蛛るかな　雨々
三日月の桜より消る手際哉　嘉丹

夢中の雪を暑き流桜かな　文里
桜見すけりや月夜の二人連　一作
夜々夜道讃岐条のはなしかな　常喜
櫻紙て又一曲里きゝて扇　仝
清水坂の蒸つゝむ暮よ桜かな　涼蒲
宵世しく桜をも免合旗夫かな　仝
那須の湯は立帰の桜かな　丑呪
雲の道てみてより見ね桜かな　芝雄
川面よ雪の橋りてはなしかな　梅斎
鐘撞は湖水へも花桜かな　寛里
雨雲をあつかひしはなしかな　一遊

山櫻

義仲も見捨出しける桜かな　田慕
夕のうへる岩や桜ありと雲　営居
松山は深き川鶯のはなし扇　一蓑
山はなし分入るさすり里近き　井圃
心さみしかれとも寄よ花のつく　汀光
静かなる雪見ん之山はなし桜　呼友
松風の酒樹をふや山さくら　月下
酒房よ一枝わらかね山桜　芭角
遠櫻こしてから晴や山桜　青蛾
谷の雪あかる老木の山さくら　白よ女
月の出て義と書く花の山桜　彩像　一甫

遅櫻

大瀧や藪ゆも雲の山はなれ　一具
山櫻折や和らかに片手綱　松雨
旅もそへ乗かゝ梅の内より山櫻　石蒋
けふ迄も埋るゝの花ちりて山櫻　千之
深草や雲の里之遅さくら　素芯
底しれぬみ櫻つゝむ重櫻　松然
独り来よ女手まゐらん山桜櫻　田菜
東さくへあへるにとまる遅櫻　雲竹
我世まも家の何るゝ遅はなれ　魚之雄
桂猿を流るる人蹤かや遅はなれ　竹里
我もうゝ浮世よ咲ん我その櫻　一具

花

稀にけふ人に見られて於山の遅櫻　不流
忘れても咲くや今年も遅はなれ　雄鎖
遅はなれ藪ふし雲はあかりかな　椿海
花に来て志るや旅の菜の花め　何得
ちりかゝる花や雀の柿衣　越後 松舎
蝶哉よ見しまぬ辺の雲かな　蚕浦
西風にゝ稀ね鶯の下騒かれ　仝
桶鉢へ花のちり出る茶屋かな　文鵬
霞て来る蝶折る花の白ひかな　文光
もゝゝすむるへとかる日数かな　笑壷
花咲て羅侍つるゝ君かな　羽白

見るほとに人はまさりて桜と花さかる　左来

花咲やこゝろ付てまた又散の花　文渉

明かゝる籬に家しくるやよひの桜　休圃

寐しつ見え来し春や雨に月　鷺郷

花の色ましゆくもあくり遠　仲女

桃梨の打連ひ色を等敷り　山雄

恋ひ初あゆみあるとき人なりも　雨考

影の名の花ちるほとしまの露　山雄

大風の後や一日花の雨　禾木

来はほとふ豆よ伸ゆや　ちか有気　ちゃう

ちるはなや振月ものゝ後一堂　祖阿

花かしこ見ぬ方兼つゝみしよし野　四葉

紙衣の羽織も出来て花の山　保白

ちるの見やり見ゝ絶ぬ花ゝ峯　雛周

あはつちりしく花の雲や盃の上　大貴

旅人に逢し兼つゝもさくら哉　羽前　玄子

羽にも継ぬ花見吉野人　伯丈

五ゝる月の荒てり花の山　凍谷

さの雨し明くても月の仍る水の音　菁阿

三日月も花ゝる夜ノよ家の恩　一貝

さく花を猶何ゆゑ惜しさの中　一楼

川舟や汝ちの花ゝ気まゝ弥　柏樹

ゆしかゝの雨に積る峰の雪　十箱
すゞしさを角屋へ叫む巷の燈　文露
家とさや山下の灯りが延ゝ　松付
梅も見え此花ともあり盛　月児
借銭や寺の中に寝て過ぎ　仝
宿よりし堂露にもよし七の母　本荘
柔味なの寺より障子黒々れ　仝
秋暮し人も花にも陶の足　名波 文肖
寺々紅葉て業草難し盃　一甫
夏見に光るゝ寺の中　斗米
萩の寺集ゝ見て露を花　以華

奏稗と書くときへ書の札　麻交
花婦も人を遊ぶや角門　仝
禅寺や花の寒を見し一つへ　栗笑
長刀の脇に障子紅木の閉ち　多与女
花の宿藁の火焚て窯焼る　兎湖
家くとひに垂曲窓の摘み花　仝
夜寄りて月に雨にも摘み船　久蔵
高山や枯よりし紅葉の雲　函捧
又所や出の巷の町　宇師
故郷の裡座敷くし春の中　孤米
人来つかひに寄るや八つ下り　享蝶

ちるさくや嵯峨ハ近所に遠く遠し　貝谷

花に浮れ来て寝ぬも浅き花の中　太挙

九人も折しくるる之夕かれた飛　泉郷

花の中ゆるの月の出し竃　古鉄

あの中憶病神の雛まつり　丞古

先嫁しおもしも花に蝶かな　仝

榛折て耐しくる鳥居ものかげ　旭丘

ぬれ衣ハきしむ物ハ老かたの家　蕪丘

竹の峰のかふれ花の花喜　二晶

花かのほるや台の桑若葉　重家

俳も来もさげ合のすきの月　仝

花の雲来つゝし松の人通り　惟学

ありた後人が悪乳舎のくれ　嵩山

一木二木算しくもの中　雄鋭

拡とらぬ枕取り花の雲　仝

花の風よ乳待か合は米く亀　茅丸

ちる花やちらぬ花ものつまいも　壷羊

あるくも眼る女あの木の所ぞ　易足

蕣花のはうる冬ある山路ぞ　羊山

のむるかを香に酔て松の花　松井

花信や甘るくの軒の余　仝

きり遊ハ陽ニて花散月深し　一之

ちる梅の麓もみえし雲の色　一之
咲花に押出されて葉唐哉　薪水
草阪に花ちる鐘の音ぞされ　夕山
世間法誰も然ん花の中　素有
菴の花静に成て出家し　葉月
住先は桃山里も花ばかり　稲我
酒呑を外して入や花の陰　友子
毎日やたゞ傍花の独言　玄子
咲ちる花の中之京しかる就　九暁
家去て花に入る寐白は　仝
咲花と思ふ花の名の咲にけり　陸奥　不着

花は人の宴の後一つ花　月斎
死ぬ身とは有ともた後花にも月　玄々
咲にまさる夕日花は蔀の花　鶯笠
又くもなき内の花の影より　仝
鏡しめ此にて椎をに家　青志
影ふや境の花を咲きけり　節く
蔵の出て人の程に鋳の空　四菜
ちるもよし落ちる花の芽吹　仝
帰りて影深を志けるもの名　双之
志んきで蔵のや色の稍より　仝
寄生木のかきたまり花の中　九暁

花雲

花雨

蓑きて雲かゝるや花の雨　五皃
あら来て晴り傍る月夜哉　鶯笠
花催ひるや雨ふる山のおもしろく　鷺閑
待くぬ夕紀あめの椿り花　廣平
かゝるてむらりまゝる月夜哉　田華
花の中池の竹も一雫　五皃
境内にあまる傘干て花の雲　椿海
行先もし果なし花の雲　森月
雨と来雲もあゝても花の雲　無才
花の雲窓を高くも散る庵　五竹
しほれや又降くと花の雨　斗米

花見

傘借てかして濡るゝも花の雨　笠縫　雨明
雲と来て見えて晴る花の雨　田翁
花の田舎ありくと見ありけり　罍禰
駿河路や草鞋もしく花の雨　素考
樽ころの傍に汗かく花見哉　一之
茅履も雲かで嬉しき花見哉　夕山
借衣の近ふ居寄て花ゝの形　陸奥　文僊
右村に扇をまねく花見哉　素有
一壷の余り残れとる花見哉　松怒
下駄挑て桃竹挑も花見哉　田華
花見ると何か人まり花見哉　玄々

木蓮花

舟下りる迄を画かねむくれんかな　寒富
木の間洩る日に噎する木蓮かな　三槐
川瀬も古児の肉の揃ひけり　雁堂
和し者も偉那と花見かな　季草
乙の字の絵姿柳なり花見かな　南よ女
振袖の舞ふ日もとる花見かな　貝谷
曲り紫の日陰に咲ける花見かな　恕雪
早咲き抑へ絵のわかし花見かな　一雨
月の出を待つ席より木蓮かな　桃鳩

海棠

海棠の日や絵の中の陰る程　布席
海棠や来る雨の東より谷　汐き

梨花

接待の接木も今は梨の花　嘉月
月影のれうげて白き梨の花　周然
接木より継ぐ一本の梨の花　五晩
清らしと庭にまじりや梨の花　一具
梨の花咲しを日毎行わく色かな　柳径
萬日の畑の東より梨の花を　雁堂
夜しの花散りぬ梨の色の濃さ　龍得
山梨や暮もうかんなかの朱　南々
茶店の葉の散りて梨の花　民枝

杏

一里行く雛く杏かな　桃鳩

木瓜

焼くる煙の木瓜の花　一具

菫

見かけて揺るゝ菫や木仏の前　鍾光

木仏留守や都の雲の痛療　笑牧 一甫

擔雉の聲ね白々うけの前　不曲

伸もて紫藤し花もてみも　文呂

癖る子も来るみちも手まて菫かな　抱儀

匂ひえぬ石のたすも菫かれ　仝

貝捨れし所にも菫咲き　ちゝ安

落菫海の底りに摘きり　乃甕

底りとはいふも宝菫草州　大梅

芳野の花にもちかく菫哉　素郎

苗菜の畑にねなましきすみれかな　貝谷

高き岡の姫佗しく菫かれ　羽前 雲山

赤菫誰がまとうも奥の細道　幸雄

升菓の古墨に芝の菫　捷く

芳しの中に一際すゝき花　松秀

松風にまつくや芝の菫　齊乃

菫咲や都めしく香き進くまる　戴星

芳野の又ほどに飛ぶかれ　芭角

石仏の藪にある菫かな　文傑

今様をかたに掛地の菫かな　丸安

菫かな荒きもなくて坂ゆかん　守香

来る人も出てすぐ菫かな　仝

咲菫窓子あらし第の形　芝雄
ゑゑ待折来花や菫　仝
うん比しう比しく般るや花菫　留鯨
船寄よまく起まる菫の形　素芯
籾石の陰よ出しや菫艸　松思
何もいふ気まあるや姫菫　之直
飛の雨よ菫吹うく宇も遠し　素芯
芦陰よ寄る舟揚や芝菫　蕎之
川風のよ分す匂ふる菫の形　文潮
近よりも此の垂くて菫寄りの色　伸女
芸するに従形色て菫みるる　亀考

連翹

川添の恍花よ菫の形　山雄
見来の恍の信るうずる従ふ　大貫
連翹の手形陰るよき年　米水
連翹の形よる内茂る暑さ哉　雄鎮
連翹や二子の手川梅の形　比々子
其翹や花の這入窓もある　庚丘

辛夷

梅花の眼より四ろ辛夷の形　守舟
ちるしと辛夷まとく作矢店　涼荷
水の籾の雲よとりしやも辛夷　八孫
雨も也く寄る従来も辛夷哉　大梅
襟出もちて風形もく辛夷哉　旭雲

茶摘

朝絢の梨の辛夷咲よりり　桃鳩
摘るゝ手も僅芽も葉の香哉　椿海
手伝ひし茶摘て居る茶摘哉　之阜
宇治川へ一群りる茶摘哉　川邑
摘ぬ手も義理に見る茶摘唄　笑彼 尾州

躑躅

衣嬉の寄るに似るる躑躅哉　座興 一露
山陰に葉の見えぬ躑躅哉　杉月
香の無き躑躅に花の咲躑躅し　芳帆
蓑笠の花かも出る山躑躅　守鳥
中々に松の木ある山躑躅　正令
石切の手にさへ咲く躑躅哉　葛之

藤

糠雨の降るに藤の咲のし哉　田蘇
三度出て見にゆる藤の咲し　其磨
此あたりの入日の藤の咲哉　妙子
庵をしく見する藤の花哉　有月
伸し咲て岩さに藤の花　夢雨
夕影に引く枝山の藤哉　守弘
暁の山にひかるる藤哉　陶烟
大切に折て捨る藤哉　雄窓
家にも折ぬ花藤かな　椿海
惜き香を移して長き藤哉　桃鳩
藤咲や来ても見ぬ夜き庵の花　雄窓

藤ゆすま笠の息しえや藤の花　星谷
特るしくゝる折やふちの花　狐米
ふち咲や建て續く神楽堂　南よ女
藤はしや隠れもし籠屋し　一蓑
藤ちるや雨晴上る宵の空　乃英
山ふぢや木しのぶ家を借て住　有月
山藤や押くまれて咲むの傍　丁お
縁し捕て実悦ゆて藤見哉　四明
宗佐の札並て残りふちの花　文佩
宅操も佐留主持つゝ藤の花　亨鳥
藤咲やくろりくと海し鴨　涼荷

ふちの花咲や梅やえみの上　道雄
櫻のしてゝ振むすや藤の花　梅亭
雨の中ふち美女物見ぬ藤の花　蒼支
竹を接て木小屋の集む藤の花　吏川
持てまてかゝ眠るや藤の花　文鵬
春山の志てふち咲ね白の庭　芳井
二階より客の出るもふぢの花　二丘
月の出ん岸の筏や藤の花　千輅
蔓もの文高うしふちの花　竹雨
松のふぢ持もてまくる雲哉　雛周
山吹の雲より落て落る哉　荷了

山吹

山吹を起して流るゝ掛川哉　粗年

山吹も折て濡たり風車　角よ女

山吹の影も折せる堤かな　素樸

山吹や山より落る雪げ水　民拔

出る花や松の雫の落て後　川舌

やゝ淋しき雫に寄りて候る哉　巣平

山吹や掛る人の拂井戸　常陸 君文

山吹や樋に入るを落て枯　素白

山吹や江州阿弥中八丶　玉葉

山吹や比叡の絶えの色紙　宗秀

山吹や内侍書る屋敷方　仝

山吹の雫の下行小家かな　素志

山吹の陰に小橋の兎も繞　沙月

山吹は木に似て草の香もあり　茶坡 一甫

山吹の中へ花散る蝴蝶かな　美文

山子に付て来る雨のを椿かな　仲女

山吹や落ちて出る水の生萱　雨杉

山吹のさしゝや手々舞　風毛

やゝ雨や蝶這出る紙札　萬々

手を手てく山吹の花咲哉　禾木

山吹に哀を吐てしまへ　石庵

山吹や世の盛衰を花の色　芦帆

草麦
呼子鳥
鳥雲入
麥鶉
若鮎

山吹や椽を行ける橋の本　五明
草麦のうち出す朝小雨かな　旭丘
何を呼ぶ声そ霞の呼子鳥　花甲
手ざはりのよき物ありて呼子鳥　一蕙
鳥雲に入や何処迄も野　句よ女
世を出でも出れも鶉の麦鶉　芳月
草の木の茂ればまた麦鶉　永斗
穂に外麦も声して麦鶉　梅亭
四五寸の麦にかくるる鶉かな　田萊
草鮎や京の名所を見の上　平石
わか鮎や浴する影山の水　麻交

小鮎
蚕
竹蜘蛛
三月尽

草鮎や取捨てる二日月　陶潤
積もりしは雨小鮎かな　可水
何見来てよ渓に小鮎哉　大貫
鮎鷹の鳥をとりて雨晴　玄字
一尾を雲にあつる山の冷　鶯笠
影ものの小鮎に影の形　柳塢
蚕のよし蚕の飯の神　蕉丘
蚕飼を見て雨の家　芳草
海山を離して桐の風　麻交
宵居に帰る花の三月尽　夕山
かやつりの中の三月尽　昭習

春惜

行春

ちる花も聲なきの行く三月尽　芦帆

春霞しはし二日や三月尽　周慈

風雨のわかれね春を惜む名見　文洲

行春や松まつる月の桑　桂芽女

ゆく春の志賀をめくれ谷の花　守夤

酒臭く志て春の日遊ふれ　凉茶

行春を嫌しらるゝ好宮　文和

足代のとまね居坐や春の行　玄々

ゆく春や今文悔る掛け分　仝

暁れたを留つ聴く春の行　山雄

惜春を辞して出舟くゝ春の行　蒻之

行春やゆく川よとどの流もなく　菊枝

木の葉の花を見る春立つ月の霞　文紋女

木の下の乱よし花に六春の行　仝

行春や二三日暮しも和紀　丁玄

ゆく春や角なきはの香も吹　五風

近道を海となつ春を春の行　抱儀

行春や米近くも城の雨坂　玄々

篇まと葉来て春の行小代　回年

行春を籠る花見る花鶏の乱　荷了

ゆく春の雲へ向ける鏡かな　之阜

行春を花のおも釣るぞかな　久蔵

春暮

暖簾もふはりくと春のゆく　如仙

ゆく春や仏の前も花かはる　有秀

田の中に山ある里や春の暮　竹子

ふ思やいつもと出ぬ春の暮　雉周

鈴やうれ衣もはれ春の暮　素妹

舟玉の灯のあかるさ暮の春　むさ雉

鶏初と借の橋かり春の暮　柏樹

うつらりと暮の会あるや無名抄　李州

春題不知

居並んでゆきをへて程春の鐘　松竹

雀の住山より春の光りれ　基妾

雨さそふよ知らす咲や春の鐘　壮貫

梅咲や今まで横の人通り　瓶乙

枸杞を摘手にさへ折欲も流し　篠塢

春和に安く擦や春の餉　素月

笛や暦秋りて笋に待る　扇和

雁よ家一つあらぬ茶ぬれ　翠笠

菜の花に大根の花や麓月夜　保月

梅挿錦の出ありゆ描待　吟霞

春の月をさ拾ひ春の月にある　玄々

あつちりと散りに雲し春の雲　文淵

せつりしも住をも枝や春の霞　公

萱草や立ちるゝ膝に初鳥　石府

俳諧十萬發句集 春之部

梅さきて淺黄も花ね柱杖　雨わ

萬歳に乗も香ふ梅の明ほの　五峴

○

ちるものに木下に麻る底なれ　羽前 蕉素

裏口のうめや山家や但ち鏡り　仝

香ゟ上に押し淺黄なり春の雨　越後 秀和

ふ樹に来しものゝ香とり　仝

淺黄し私香にちり花梅のも　公姑

紅梅ひる直香を淺し茶梅唄　羽前 来六

昭和學園短大 受入 第1909號 昭和30.9